

改造の歩み

瀬澤(ヲツザハ)の佐藤氏は、農家で漁業家で且つ役場の書記をして居る。大きな昔風の家である。後の岡が一帶に海の際まで、無数の土器石器と之を使用した人々の埋没地であることを知らずに、久しい歳月の間之を耕して暮して居た。世の中の變らうとする近頃に爲つて、色々の學者が訪ねて来るやうになつたのさうである。

十九年前の普請と謂ふが、元の地形に元の手法で、以前の材が多分に用ゐてある。栗の木其他の天然の曲線が眞率に利用せられ、殊に勝手の上の隅虹梁は立派な裝飾である。江刺地方で童話に爲つて居る竈神のヒヲトコの木的面が、通例掛けて置かれる場處である。自分は此臺所に腰を掛けて、杵や臼の話をした。

氣仙の村々に今も用ゐらるゝ手杵の功用を尋ねて見た。即ち上下に頭の有る眞直な杵のことで、我々が分り易い爲に、平素兎の杵などゝ名づけて居る所のものである。兎の杵は十何年前に、天草下島の大江あたりで、麻紋附の不斷着の老女が使つて居るのを見て喫驚したまゝであるが、此邊の農家では今も只の普通の器具である。餅搗きには二本で搗くこともあると謂ふ。之に對して柄の長い方の杵を打杵と呼んで居る。打杵は重いからなごゝ謂ふのを見ると、是には大小の種類は無いものらしい。

佐藤氏の土間には此以外に猶二通りの臼がある。曰く石の挽臼、曰く入口右手の地唐臼である。此新舊の雜居が可笑しいと思ふと、村には更に第五種の賃春き臼屋が有ると謂ふ。爰は半島で流れが無いから所謂水車では無いが、電氣を動力にして多數の杵を動かして居るので、兎の杵が重寶がられるやうでは、此方は丸

で御客が無さうなものだが、昨今又一つ開業すると云ふから、必ずしもさうで無いやうだ。

本吉郡の大島でも、又唐桑の半島でも、ちやんと石臼が有るのに、手杵で豆の粉等をはたいて居る。譯を聴くと此方が力が入らぬからよいとも、又は舂いて置いて後に挽くのだとも答へて、一向に事情が呑込めぬ。さうかと思ふと舊盆の季節が近くなつたので、此等の在所から石油發動機の渡船に乗つて、娘や女房たちが何人と無く、毎日五升一斗の小麥の袋を脊負ひ、氣仙沼附近の水車小屋へ、團子用の粉を挽きに泊り掛けに渡つて来る。

この複雑極まる状態は、見やうに由つては杵臼問題の討究に、萬人が心を傾けて居る結果とも謂はれるが、悪く評すれば文明を珍膳佳肴の如く考へて、一箸づつは嘗め試みる神農主義、譬へば此邊の何文堂の店に、日蓮大本忍術姓名哲學の

類から、ローランやラッセルの白つばい本迄が肩を並べて、色彩を誇つて居るのと同様の現象とも言ひ得る。

但し相州津久井の内郷村などでは、又別様の話がある。村で生れた校長の長谷川氏は、十二三歳の頃まで家にヒデ鉢と稱して、松を焚いて燈火とする爲の石の平鼎を用ゐて居たのが、其からの廿四五年間に行燈からカンテラ、三分心五分心丸心のランプを経て、今はもう電氣を引いて昔の儘の勝手を照して居ると話された。而も其最近の古物のヒデ鉢が、どう成つて了つたものか、村内に幾つも遺つては居なかつた。この氣仙郡の半島にも、ヒデ鉢とは謂はぬが松を焚く土製のランプは有つた。或は又毀れた鍋なども利用して居たと云ふ。而うして今や之を忘れ、若くは笑はんとして居るのを見れば、篤實なる農民とても、決して物を昔にするの能力を全然缺いて居るのでは無い。只面倒にそんな事をする必要が無か

つたまでである。

伊豫の松山から道後湯へ通ふ電車は、今はどうか知らぬが以前は車内に煙草を許して居た。ひよつこりと乗り込んで来た草鞋がけの老人が、燧石を出してカチカチと遣るのを見て、英國の一旅客は眼を圓くし、あゝ日本は是だから解し難いと感歎した。なに君の國だつて随分十六七世紀の發火法を以て、今尙色々の文物を「煮て食ひ焼いて食ふ」では無いか。しかも其保守主義がいつでも完全に手前勝手だ。我々の月中の兎の杵には、自慢では無いが其弊だけは無い。まあ御互ひに今すこし考へて見よう。

二十五箇年後

唐桑濱の宿と云ふ部落では、家の數が四十戸足らずの中、只の一戸だけ残つて

他は悉くあの海嘯で潰れた。その残つたと云ふ家でも床の上に四尺あがり、時の間にさつと引いて、浮く程の物は總て持つて行つて了つた。其上に男の兒を一人亡くした。八つに爲る誠におとなしい子だつたさうである。道の傍に店を出して居る婆さんの處へ泊りに往つて、明日は何處とかへ御參りに行くのだから、戻つて居るやうにと迎へに遣つたが、をら詣りたうなごさんすと言つて、遂に永遠に還つて來なかつた。

此話をした婦人は其折十四歳であつた。高潮の力に押廻され、中の間の柱と蠶棚との間に挟まつて、動かれなくて居る中に水が引去り、後の岡の上で父が頻に名を呼ぶので、登つて往つたさうである。其晩はそれから家の薪を三百束ほども焚いたと云ふ。海上から此火の光を見掛けて、泳いで歸つた者も大分あつた。母親が自分と同じ中の間に、乳呑兒と一緒に居て助かつたことを、其時は丸で知ら

なかつたさうである。母は如何な事が有つても此子は放すまいと思つて、左の手で精一杯に抱へて居た。乳房を含ませて居た爲に、潮水は少しも飲まなかつたが山に上がつて夜通し焚火の傍にちつとして居たので、翌朝見ると赤子の顔から頭へかけて、煤の埃で胡麻あえのやうになつて居たさうである。其赤子が歩兵に出て、今年はまだ還つて来て居る。よつぽど孝行をして貰はにやと、よく老母は謂ふさうである。

時刻はちやうど舊五月五日の、月がおはいりやつたばかりだつた。怖ろしい大雨ではあつたが、其でも節句の晩なので、人の家に往つて飲む者が多く、酔ひ倒れて還られぬ爲に助かつたのも有れば、其爲に助からなかつた者もあつた。總體に何を不幸の原因とも決めてしまふことが出来なかつた。例へば山の麓に押潰されて居た家で、馬まで無事であつたのもある。二階に子供を寝させて置いて湯に

入つて居た母親が、風呂桶のまゝ海に流されて裸で命を全うし、三日目に屋根を破つて入つて見ると、其兒が疵も無く生きて居たと云ふやうな珍らしい話もある死ぬまじくして死んだ例も固より多からうが、此方は却て親身の者の外は、忘れて行くことが早いらしい。

併し大體に於て、話になるやうな話だけが、繰返されて濃厚に語り傳へられ、不立文字の記録は年々に其冊數を減じつゝあるかと思はれる。此點は五十年前の維新史も同じである。自分は處々の荒濱に立止つて、故老たちの無細工なる海嘯史論を聴かされた。是亦利害關係が尙多い爲に、十分適切とは認められぬが、一般の空氣はやはり明治の新政と等しく、人の境遇に善惡二様の變化の有つたことを感じさせて居るやうであつた。

もつと手短かに言へば金持は貧乏した。貧乏人は亡くした者を探すと稱して、

毎日々々浦から崎を歩き廻り、自分の物でも無いものを澤山に拾ひ集めて藏つて置いた。元の主の手に復る場合は甚だ少かつたさうである。恢復と名づくべき事業は行はれ難かつた。智慧の有る人は臆病になつてしまつたと謂ふ。元の屋敷を見棄て、高みへ上つた者は、其故にもうよほど以前から後悔をして居る。之に反して夙に經驗を忘れ、又は其よりも食ふが大事だと、すん／＼濱邊近く出た者は、漁業にも商賣にも大きな便宜を得て居る。或は又他處から遣つて来て、委細構はず勝手な處に住む者も有つて、結局村落の形は元の如く、人の數も海嘯の前よりはすつと多い。一人々々の不幸を度外に置けば、疵は既に全く癒えて居る。

三陸一帯によく謂ふ文明年間の大高潮は、今ではもう完全なる傳説である。峯のばら／＼松を指さして、あれが昔の街道跡と謂ふ類の話が多く、金石文などの遺物は一つも無い。明治二十九年の記念塔は之に反して村毎に有るが、恨み綿々

など、書いた碑文も漢語で、最早其前に立つ人も無い。村の人は只専念に鯉節を削り又は錫を干して居る。歴史にもやはり烏賊のなま干、又は鯉のなま干のやうな階段が有るやうに感じられた。

町を作る人

焼けてはならぬものは勿論外にも多いが、取分けて大正年間に於ては、町などは火事に遭はせたく無いと思ふ。個人には恢復と云ふものが有る。町には只變化あるのみである。甲の町では一年越しの草原に、思ひ／＼の假屋が淋しく伴を待つて居る。焼けて六年になる乙の都會に於ては、赭禿の土藏ばかりが僅に堅實の觀を保つて居る。街區整頓だの屋上制限だの、人の後から案出することは何でも皆斯うだが、亂雜を加へ狼狽の狀を顯著にする以外に、些かも積極的の仕事をし

て居らぬ。自分はぐらくとする三階の柱に倚り、氣の毒な下界を眺めつゝ、一夜の宿泊をさへ悔いた夕もあつた。

其につけても世田米は感じの好い町であつた。山の裾の川の高岸に臨んだ、到底大きくなる見込の無い古驛ではあるが、色にも形にも旅人を動かすだけの統一があるのは、幸ひに新時代の災害に罹らなかつた御蔭である。板葺の、たつぷりとした妻入の家で、何れも障子の立つ二階に手摺を附け、屋の棟には勝男木の名残と見える單純な裝飾が、道路に面した一端だけに一様に附てある。表から見れば立派な町屋であるが、住民の多數は實は馬を飼ふ農夫である爲に、之に相應する支度がちやんと家の他の部分にはしてある。私は早天に一の民家の脇を通つて川原に下り、冷たい水に葛の花の流るゝを汲み、未だ萎まぬ對岸の月見草の野を望み、それから又第二の家の横手を還つて來たが、貧富の差は有つても家の作り

は全く一つであることを知つた。即ち横を正面とすれば在方の農家と同じく、玄關と勝手口が並んで狭い庭に面し、厩と便所と物置とが各別棟で、其外に僅かの菜園が有る。要するに間口を狭く地割した爲に、住宅を横向にしたゞけである。

東京の近くでも、府中以西の甲州街道などに、此形式の割地の一層簡單なものが有つて、あの邊に限り草屋が縦列を爲して東に面して居る。但し是には町を爲す迄の變形は加へて無いが、一定の長さの道路に沿うて、成るべく多數の民家を置かうとした努力の跡は見えて居る。佐渡の兩津の町なども亦一つの例である。此方は路地を更に細くして、其全部を屋根の下に覆ひ、以前は冬分の船置場も一緒にしたものか。海と湖水との兩側とも、殆ど水の際まで一つ屋根を葺下して居り、町をあるけばどの家もどの家も、暗く細長い土間を通して、きらりと鮮かな水の光が見える。それがあの町の美しい特色である。

不吉な想像ではあるが、焼けたら是もどう爲るであらうか。家並に定まつた一つの型があつて、相持ちに揃ひの見事さを保たしめる原因には、勿論第一に屋敷割渡し其他の行政上の制限、第二には大工の流義の固定と云ふことを算へねばならぬが、此二者以外に更に隠れたる一條件が有つた筈である。其は平たく申せば多勢の力である。並の人のする事をせぬ者を憎む力である。協和など、謂ひながら、自分たちで選んだ役人を輕んじ、恩を掛けたから目下だと云ふやうな、封建的の考へ方をするものだから、役人の方でも鼻息を窺ふ政治をする。金持の氣の儘は今の町では大抵通つて居る。獨り祭禮の衣裳や花笠提灯ばかりでは無い。只一軒の店が道へ突出してショウウインドウでも作れば、百千の家の前の雁木が無益になつてしまふ。ペンキ塗の高い家が一つ出来れば、雪を卸す共同組織が變更せられねばならぬ。北國の都會の年増しにいやになつて行くのは、火事の害と謂

ふよりも、寧ろ旦那衆の勝手な趣味と謂ふ方がよい。

東京は既にひどい土埃になつた。在所では何事も物遠い。吾々が靜かに文明を味はひ得るのは、地方の都會が唯一つの頼みであつた。其が殆ど何人の責任でも無く、水は汚れ市場は掃く人も無く、家々は眞似と虚偽との展覽會のやうになつて行く。町を作る人はもう永久に出て來ぬのであらうか。悲しいことである。

蟬鳴く浦

今まで船室の疊の上を、ずる／＼滑つて廻るやうだつた大濤が、一寸眠つた間に丸で靜かになつて居る。起きて出て見ると、右手に茂つた山が有つて、盛にミン／＼の聲がする。其ほど陸近く汽船は入り込んで來たのである。越喜來(ヲツキライ)の灣だと乗客の若い水兵が教へてくれた。

眼の細い頬の紅いふとつた青年である。暗い中から一人かた／＼と、堅い靴で甲板を歩いて居たのは此先生に違ひない。船員は皆草履か徒跣、他の御客様は悉く酔つて臥て居たから。而もこの船に強い海の人までが斯んな事を謂ふ。水害さへ無けりや汽車で来るのだつた。釜石から山を越てたつた六里だ。汽車が不通だと謂ふから鹽竈を廻つたら、まだるツこくて仕方が無いと。實際今日は天候の爲に、もう六時間以上も遅れて居るのだ。

水兵の親たちは灣口に近い崎濱と云ふ部落に住んで居る。今日は舊曆の七日盆だ。餅でも搗くだらうと思ふ家が南向の澤に、一軒も残らず顔を出して居る。勿論彼の家の屋根も見える筈である。又見えて居るらしい顔付もして居る。今度で二度目の休暇ださうである。もう還つたも同じだ、嬉しいだらうと言ふと、更に其眼を細くして笑つた。

わし等は他の者に比べると大分損です。慰勞と合せて十七日の休暇だが、往復に五日近くつぶれますと謂ふ。崎濱は汽船の着く浦濱から又一里二十五町ある。蟬の鳴く日盛りの山を、二つ越えて戻らねばならぬ。それに此端舟の遅いことは如何だ。客も手傳つて無暗に喚ぶと、島に出て居たと云ふ屯田船頭が、泡を食つて漕いで来る。下りる荷物廿三個で其半分が米、三分の一はサイダーや東北正宗の饅頭、それから客が一人、其客はもう小舟に飛込み、うねりの中で頻りと積卸しの手傳ひをして居る。どうしても人を貨物に殉せしむる航路と見えた。

少くとも二者の取扱は同等であつた。幸ひにして多數が吐くほど酔つたからよいが、御晝の入港が夕飯まで遅れても、船には賣る食物も無かつた。また茶の道具も無いと謂ふ。子持ちの女が幽霊のやうな聲で、時々ボーイさんを喚んで居たが、水は終にくれなかつた。特等室には流石に水の罎が一つある。さうしてコッ

ブは無い。あきれたものだ。

此ちや寧ろ荷物に爲つて、しつかりと縛られて来た方がよかつたと思ふと、彼等は必ずしも左程偏頗では無かつた。船員が遣つて来てハッチの蓋を揚げて、不意に明るい日がさつと差込むと、御伽話で聞くやうな聲でチウ／＼と鳴き、船底を駆けあるく物がある。やちきしよう、西瓜を斯んなにかちつて居やがる。オヤ蓮の實も食つたなど、如何にも興味有る発見をしたやうな聲を出す。

船酔さへ治れば此方も無駄口ではひけを取らぬ。事務長さん、質屋には蟲喰鼠喰兩損と云ふことがあるが、船でもやはり「鼠喰片損の事」と云ふ張札でもして置きますかね。へいいや、張札は致しませんが、社の規則には何か書いてあるやうです。この鼠と云ふやつが悪戯なやつで、別に腹がへつたから食ふのでは無いのです。だからメリケン粉などは百袋有れば百袋とも一晩に穴をあけますといふ。

は、あ成程だ。鹽竈以北の海邊に住み、熱でも有つて西瓜を待つつの輩は、折々はあの子持ちのおかみさんの如き泣聲を出して、さうして失望せねばならぬのだ。自分等だけでは無い。あきらめられぬことも無いやうだ。

煙草の専賣でも同じだが、「いやならおよしなされ」位遣瀨ないものは無い。併し日本の國民性は此點にかけては堅忍不拔で、多勢と共になら随分いゝ辛抱をする。其からごうにも斯うにも成らぬ時は、所謂轉じて弱を示すの策も知つて居る。三陸沿海の鐵道などは實に深い智慧だ。此線の開通で他日地主の原始林が高く買れ、清い溪流の岸で古いサイダーを賞することが出来るなら、言はず張儀を秦に遣つた汽船會社の御蔭である。ごんな淋しい山でも澤山に隧道を掘つて居るうちには、金銀鑛に當るかも知れない。悪い石炭でも莫大に焚けば、鼠色の顔をした御客が岩を寝めに來るだらう。何度毀れても蜀の棧道さへ造つて置けば、厄介な

四面の海などは無いも同然だ。茲に於てか始めて大陸的氣風を養成することが出来る。とても云ふやうな事を考へて居るのでは無いかと思はれた。

おかみんの話

宮城縣では宿でも茶店でも、「おかみさん」と云ふ語が用ゐられなくて不自由であつた。もう其心配は無いから今度は其話をしよう。

此方面では一般に、「おかみさん」と謂へば盲目の女である。めくらで迂散な職業の者と云ふことになるから、なんぼ東京語の權威でも、さう呼ぶには忍びなかつた。略して「おかみ」と謂へば勿論更に悪い。登米以北の舊仙臺領に於ては、區別の爲か「おかみん」と後を跳ねて居る。實用には何のたそくにも爲らぬが、話をするには此方を使つて置かう。

自分はおかみんの最も有力なる季節に田舎をあるいた。殊に新盆の家に於ては飛躍するさうである。何れの村にもはた町にも、概ね一戸以上のおかみんは住み電燈が有れば電燈の光にも照されて居るが、洋服を着た人の眼だけは却々其所に達しない。飯野川の町で私の頼んだ老按摩は、儼然たる絹の羽織の、某翁とも名づくべき人格の盲人で、此町にもおかみは居ますかねの問に對し、居るらしい御座りますなどとぼけたが、うまく弱點を突かれて無造作に落城した。

昨日月濱まで同船した「おかみ」は、實に可愛い子供を三人も連れて往つた。「おかみ」は子連れである者と見ると獨語のやうに言ふと、左様でござりまするか。御世話様になつたことでござりましょう。あれは手前が娘でござりますと謂つてしまつたものだ。なアに聳が手前と同職でございまして、當節は鳴子へ稼ぎに參つて居て、留守が無いとつて斷つたのでござりますが、どうでも來てくれ

と申すのでアして往きました。雨が降つてどうしたかと案じて居りましたなど、忽ちにしておかみんの家庭の、甚だしく眼に乏しい事實まで教へてくれた。御世辭では無く此按摩の孫息子は、眼元の涼しい佳い兒であつた。而うして其名は「あきら」。哀れな話である。

「あきら」のアツバは聲の太く且つ嘎れた、聰明な二十八九の婦人であつた。大工の道具箱ほどの箱を、紺麻の風呂敷に包んで持つて居た。あの中に在る物を詳かにしたい爲に、大正年代の若い學者が二人以上、此年頃辛勞をして居るのだ。どこ迄も運命的な箱ではある。盛岡近邊の「いたこ」は、あの中へオシラサマと謂ふ物を入れて居るよ。それは／＼不思議な力の有るものだよ。聞いたことが有るかねと言ふと、按摩さん少しせき込んだ。オシラサマならば此邊のおかみも皆所持して居ります。いや桑の木や何かで拵へるのは、道の上から申して正しいも

のではござりますまい。オシラは竹と極まつたものであります云々。さては桃生郡には竹のオシラガミがあるのか。是も亦一つの新発見であつた。

老人の變な講釋を綜合すると、少くとも此地方にのみは、巫女の Initiation の儀式は尙若干の莊嚴を保つて居る。神附けと謂ふのは即ち是で、女がまだ女に成らぬ中に行ふ習となつて居る。當日は界限のおかみ達悉く集り、その若い盲女を中に圍んで祈り立てると、外形最も力無く内部が最も充實するに至つて、手に持つ御幣が幽かに震動し始める。と師匠の「おかみん」が潮合を見て、我膝から床の上に押放し、ごなた様でござりますと問ふのである。之に答へて出雲とか稻荷とか、最初に名乗つた神が一生の守護神になることは、綾部も丹波市も同じことである。時にはどうしても神が憑かず、何度も日を選んでやりなほすこともある。オシラサマは神憑け滞りなく終つた時に、師匠が作つて與へるものであるといふ。

祭の日毎に美しい布で包み添へ、頭部は誰にも見せぬ「しん」が籠めてある。大切なものだと謂つたが何の意味かよく分らぬ。佐沼の高橋清治郎氏は小さな御幣だと言はれた。そんな實例も有るらしいのである。

但しオシラサマは持つてはあらくが、死靈の口寄には決して用ゐない。一年の中の或季節には、之を祭り又占を問ふことがあるらしいが、地方的に作法も變り結局詳しいことは分らぬ。自分は其後之を根問ひしようとして或村の村長に却つて詰られた。そんな事を知つて何になさるかど。あゝ村長さん、何の爲にもならぬ學問に、吾々は執心して居るのです。それは吾々の道樂としても、村の人の方にも諦められぬ過去、見究められぬ將來のある限り、つまりは人間に盲目のある限り、おかみんの弓とオシラは、そつとして置かれたら如何です。少くとも皆の眼が、「あきら」の眼のやうに清く澄むまで。

人の子の心のやみは果も無しつひの光を何に求めむ

處々の花

やちには到る處、盛りにもど萩が咲いて居た。東京近くの溝端で見るとものに比べて、紅色が一層冴えて感ぜられたのは、種類に由るか、はたあたりの空氣の致す所であつたか。何れも廣大な區域を占めて、同じ群のみで自由に咲いて居る。折々は立止つて久しく眺めるほどの美しさであつた。

百合は山野に在るものは既に實になつて居り、食用の鬼百合ばかりが村々に多かつた。どう云ふわけか農家では、之を畠の中に少しづつ離して栽ゑて居る。まだ穂の出揃はぬ粟生の中にもまじつて居る。稍苜頃近く黒ずんだ陸稗の畑からも抽け出て居た。眼の醒めるやうな丹色である。殊に大豆は本年は上作で、ま

だ一枚も枯葉の見えぬ青々とした広い耕地に、此花の幾群も日に照されて立つのを見ながら、茶店の縁などに腰を掛けて居ることは、如何にも贅澤なる休息であつた。冷氣に弱いのか北に進むにつれて、次第に百合は有つても花が少なくなる。現在が消えて行くやうに感ぜられた。

秋草は之に反して南の方ではまだ花を見ることが出来なかつた。女郎花は姿ばかり、桔梗は僅かに蕾で、萩は野に剩るくらゐであつて、しかも只一様に緑であつた。閉伊を二郡に区分する大澤木の峠路に於て、葛花の風情は初めて之を見た。海に迫つた片岨の、晴々とした長根である。浪板から登つて二里餘りで船越へ下りる。何箇處か大きな赤松が有つて目標とも蔭とも爲り、其間に僅かづゝの小川が流れ、流を渉る度に路は屈曲して居る。葛の花の盛んに散つて居たのは、斯う云ふ曲り路の角が多かつた。時としては仰いで見ても葉も見えぬことがある。日

光を慕ふ植物で、蔓を托した木の頂點に行つて咲いて居る。散れば刻々に色が變るから、路面はおのづから紫地の錦であつた。

宮古以北は野田の玉川のあたり迄、言はず一續きの大長根である。只是から流し出す山の水が多量な爲に、おりてはすぐに登る三四百尺の深い澤を、幾筋と無く設けて行人を悩ますだけである。遙かに過ぎてから振返つて見ると、見通す限りの海岸の丘が、上は一文字を爲して居る。莫大な秋の花を、載せて居た臺地であつた。萩なども此高原では繚亂として咲いて居た。或朝は小雨に近い霧で、忽ち路に迷つて炭焼の澤に入つてしまつた。炭焼に教へられて小松林の近路を抜けて見ると、そこにも別の旅人が立止まつて牛飼に同じ路を尋ねて居る。十頭近い牛が大息を突きながら現れて来る。此塙を行けば松が一本有ると牛飼が言つた。ハナワは蝦夷語のバナワの名残で、上の平らな丘のことを謂つて居るらしい。露

が深いから是で拂つて行けど、二尺餘の木の枝をくれるのを、其にも及ばぬと元氣のよい青年だ。莫産をくるくると身に巻いて、泳ぐやうにして前へ進んでくれる。其野原が一面に他の草も無く萩であつたのは風流だが、自分等は只面白半分、古人が「珠にぬかんと取ればけぬ」など、謂つた露を、振盪しながら通つてしまつた。

砂濱へ降りて見ると、往々にして低い玫瑰の林叢がある。花は乏しく實は稍熟して、其下では蟲が鳴いて居る。北地の秋は此邊から寂しくなつて來るやうだ。米田（マイタ）の山の裾には眞白な工場が一つ在つて、軌道が長々と其から濱へ通つて居る。さうして煙も昇らず又人も居ない。こんな處で何を運搬するつもりだらうか。さあ、大方「せきばく」でも運ぶのであらう。

斯んな事を言ひながら、吾々が長根の旅の日は終つたのである。

鶴住居の寺

江戸では青山邊の御家人等が、近世まで盆の月には高燈籠を揚げて居た。將軍某駒場の狩の歸るさに、其光の晴夜の星の如くなるを賞でたと云ふ話が遺つて居る。それが多分御一新の變化から、一樣に軒先の切子燈籠と爲り、更に轉じては岐阜提灯の水色と爲つて、おまけに夏の央には引込めてしまふ故に、所謂秋のあはれ迄が、今では此様に個人化するに至つたのである。百年前の秋田領風俗問狀答書の繪に見えて居る通りの昔風の燈籠は、陸中に入つてから次第に之を見掛けるやうになつた。寺の境内に立てた高い柱には、晝の間は白い幡を掲げて置く例も有るが、尋常民家の燈籠木に至つては、何れも尖端を十字にして、杉の小枝を三房結はへてある。以前は其木が必ず杉であつたことを、是だけでも示すのみな

らず、村に由ては今尙天然の杉の木を、梢ばかり残して柱にして居るものさへ有つた。

今では不幸の有つた翌々年の益まで、此燈籠は揚げる習ひに爲つて居る。空を往來する精靈の爲には、誠に便利なる落標であるが、生きた旅人に取つては此程物淋しいものは無い。殊には白い空の雲に、又は海の緑に映じて高く抽け出で、立つのを見ると、立止まつては此等勞働に終始した人々の、生涯の無聊さを考へずには居られなかつた。閉伊の吉里吉里の村などは、小高い處から振り返つて見ると、殆ど一戸として燈籠の木を立てぬ家はない。どうして又此様な夥しい數かと思ふと、やはり昨年流行感冒の爲であつたのだ。

佛法が日本國民の生活に及ぼした恩澤が、若し唯一つであつたとするならば、其は我々に死者を愛することを教へた點である。供養さへすれば幽靈も怖くは無

いことを知つて、我々は始めて厲鬼驅逐の手を緩め、同じ夏冬の終りの季節を以て、親しかつた人々の魂を迎へる日と定め得たのである。合邦の淨瑠璃にも有る如く、血縁の深い者ほど死ねば恐ろしくなるものだなど、謂ひつゝも、墓を繞つて永く慟哭するやうな、やさしい自然の情を露し得ることに爲つたのも、此宗教の御蔭と言はねばならぬ。

鶴住居(ウノスマキ)の淨樂寺は陰鬱なる口碑に富んだ寺ださうだが、自分は偶然其本堂の前に立つて、しほらしい此土地の風習を見た。村で玉璣珞を呼んで居るモスリンを三角に縫つた棺の裝飾、又は小兒の野邊送りに用ゐたらしい紅い洋傘、其他色々の記念品にまじつて、新舊の肖像畫の額が隙間も無く掲げてある。其中には戦死した青年や大黒帽の生徒などの、多勢で撮つた寫眞の中から、切放し引延ばしたのもあるが、他の大部分は江戸繪風の彩色畫であつた。不思議な

ことには近頃のもの迄、男は鬘があり女房や娘は夜着のやうな衣物を着て居る。獨で茶を飲んで居る處もあり、三人五人と一家團欒の態を描いた畫も多い。後者は海嘯で死んだ人たちだと謂つたが、さうで無くとも一度に溜めて置いて額にする例もあるといふ。立派にさへ描いてやれば、よく似て居ると謂つて悦ぶものさうである。斯うして寺に持つて来て、不幸なる人々は其記憶を、新たにすれば又美しくもした。誠に人間らしい悲しみやうである。

淨樂寺の和尚は此界限の書家と見えた。凡そ街道の右左に立つものは石でも木標でも、一として同じ筆に成らぬものは無い。五山盛時の寫本の字を想はしめるすこし右擧がりの速い書體で、庫裡の障子まで悉く其反古であつた。月とか梅とか一字づゝは讀めても、文句の全體は校長にも判るまいと思ふやうな偈を、遠慮も無く何れの凡人の墓にも書いて立てゝ居る。足で米を磨ぐ禪僧の氣樂さが、殊

に斯んな村では十分に許容せられて居るのである。此和尚は自分の寄つた時には生憎留守であつた。さうして女ばかり三四人の家族が、縁先に出て頻にまぶしの繭をむしつて居た。

樺皮の由來

北に進んで外南部まで出ると、不思議に白樺の樹が影を見せないが、この樺皮の話もちやうど其邊から、知らぬ老人が段々多くなる。八戸ぐらゐが境のやうに思はれた。

久慈から南、釜石から北、殊に閉伊二郡の村々に於ては、舊家と謂ふよりも名族と呼ぶよりも、カバカハの家と聞く方が解りが早い。少くとも門閥が何を意味するかを知らぬ人々まで、カバカハの尊いことだけは感じて居る。而も其カバカ

ハの何物であるかに付いては、押して聞けば誤謬を語るかも知れぬ程、茫漠たる知識しか有つて居らぬのである。

諸説を綜合した上で自分の推定した所では、カバカハは白樺の樹皮を利用した一種の紙である。寒い山國に於て發明せられたるパピロスであつた。極端なる簡易生活に在つて、楮の紙の手に入らぬ時代、尙是非とも後に傳へねばならぬものは、之を樺皮に描いて置いたのである。文字は之を読み得る人が有つて始めて有用に爲るのだが、其よりも更に必要だつたのは阿彌陀様の御影、乃至は六字の御名號である。後世の眼から見れば、弘法大師や慈覺大師の御後姿とも思はれる殊勝な善知識が、生を殺しては生を營む浦の民の境涯に墨の衣の袂をしぼり、さつと通り過ぎてしまつたやうなのが、此地方の昔の佛教であつた。野の末森の奥の人生は、結局は一卷の古い樺皮に依つて、救濟せられねばならぬ場合が多かつた

のである。地頭の富が一寺を建立し、一軀の本尊を安置するを得た以前、あの塚の松の木に名號の一軸を掛けて、村の者ばかりで死者を取置きしたさうだと云ふ話が、到る處に語り傳へられて居る。即ち當時の所謂頼うだ御方は、心の餓ゑたる者に精神上の夫食までも、貸し與へる風があつたらしいのである。

關谷の武藤氏の家には近い頃まで、此樺皮のまだ何にも使用せぬものが何枚か有つた。それはく精巧なものであつたさうである。而も地方に由つては、既に此様な樹皮を利用した事をも忘れてしまつて居る。單に南無阿彌陀佛の掛軸が、古くなつて何遍と無く無細工に修理せられ、まるで白樺の皮見たやうになつて居るから、其でカバカハと謂ふのだと考へて居た人もある。

或は又何故なるかは知らず、カバカハは此古い一軸を掛けて、村の舊家で毎年營む所の祭の名だと謂ふ人も有つた。其祭は殆ど例外も無く、舊曆の十月を以て

行はれた。一家一族の外にかご子などと名つけて、此日は必ず来て拜をせねばならぬ人々が有つた。しかも寺の僧は之には與らぬので、御正體は佛號である場合にも、祭の式には宅神祭の名残かと思ふ古い形を留めて居た。遠野の盆などでは、カバカハは寧ろ異名で、通例はオクナイサマと稱へて居る。オシラ神とオクナイ神とは、必ず深い關係が有ることと思ふが、あまり問題が幽玄であつて、未だ其一端をも把へることが出来ぬ。

唯吾々の斷定し得る一事は、東北偏土の民間佛教が、もと淨土の念佛では無くして、眞言の念佛であつたことである。それから一向宗で所謂異安心、或は近世江戸で奇獄を起した御庫門徒の信仰は、何れも此地方に今も盛んなる「隠し念佛」の一分派で、實は密宗の祕密念佛の教理から、説明せらるべきものであつたことだ。此點にかけては久しい昔から、今に至るまで坊主たちは誠に無能であつた。

其よりも樺皮を持つ程の舊家は、遙かに有力に人の魂を濟つて居た。些し學びに往つてはどうかと思ふ。

佐々木鏡石君が近頃研究を發表した奥州の座敷童衆も、やはり主として右の樺皮の家に居る。彼等は今日尙小さな足跡を残し後姿を見せ、又は肌の透くやうな薄絹の袖を顔に當て、燈火の彼方に坐して居ることもある。しかも何が因縁で斯く迄吾々と親しい神に現れるかは謎である。烏居龍藏氏等はよく好んで有史以前と云ふ語を使ふ。自分は其よりも世人が今少しく、有史以外を省みんことを希ふ者である。

禮儀作法

雪の頃に來て下さらなくつちやア何もならぬ。是れ霸氣ある東北人士の折々用

ひたまふ一拶である。はいく此には一言も無いやうなものだが、實は此澤此野山に、雪の積つて寒うい位は、想像の及ばぬ程の別乾坤でも無い。其よりも夏中遣つて来たばかりに、曾て想像を試みたことも無かつたものを、どうです私は観て還るのであります。

昔は大黒様の風呂に入つて居らるゝ所を描いて下さいと謂つて、畫工を困らせた人が有つた。成程あの福神の頭巾の下は、今以て明瞭ならぬ厄介な問題である。畫家にして同時に喜田博士で無い限り、引受けにくかつたのは尤もである。又或時大津の濱に於て、一尾の鹽鮭を肌を取匿して露顯した小冠者が、慨歎して斯う謂つたさうである。如何な女御更衣とても、斯う素裸にしたなら干鮭の一匹ぐらゐは出て來よう。吾々の皮相の果して真相なりや否やを確めるに際して、假に伯龍が天女の浴みを窺つた迄の機會は無いにしても、切めては同情の眼を以て、

奥州の夏の女を觀てあるかねばならぬ。殊に國民の主流が暑い南から來たとすれば尙更さうである。

先づ第一に思ふのは、名前に囚はれる吾々の癖である。風俗卑野なりなど書く紀行家に言はせると、湯卷の上に襦袢一つで、細帶代りに前掛を締め、寒ければちやん／＼をはおるなど報ずるのが普通であらう。成程其通りで、おまけに斯んな失禮ななりでも斷らぬやうだが、全體右に列擧した日本語は正しいか古いか。昔の語でならば多分は斯う言はねばなるまい。「民の女のキヌは袖もたけも力めて短くして動作に便にして居る。下のモは必ず身を匿らせて居るが、上のモは時として身幅に足らぬこともある。秋の境の涼しい朝夕には、キヌの上に更に手無しを着る」と。

第二の誤解は本末の顛倒だ。常にキヌの襟と袖とに花やかな帛を附けるのを、

元來が襦袢だから身頃だけには儉約をした爲と見る人は、言はゞ自分のあたじけなさを以て他を推すもので、もし是が眞に見得であつたならば、ついぞ隠すことの無い部分に、恥を露はして置かう筈も無い。實際又二色の小帛を求め、わざ／＼配合の趣を味はつて居るのである。古い女の衣裳に此類の仕立方は無かつたかどうか。少し調べて見た人だけに口は利かせたいものである。

濱の女の前掛が四幅も六幅も有るのを訝る者も、やはり日本人が奈良朝から、祇園の仲居の如くであつたと思ふ輩で話にならぬ。吾々の母たちが皆脛巾を省き足にまつはる所謂脚布ばかりで暮して居たとしたなら、とくの昔に手足は饅頭の如く柔かくなつて、到底朝比奈三郎や加藤虎之助は、斯邦には生れなかつた筈では無いか。

流行と正風との論は、單に古池の徒のみの管轄すべきもので無い。東北の婦人がアニリン色素を悦び、モスリン紀州ネルに心を傾けるのは勿論流行であるが、末法の今日に至るまで、上下二つの裳を堅く身に纏ひ、出來合ひの人形のやうに只きればかりを節約したがる改良服論者を、毅然として斥けて居るのは、即ち是れ正風の尊さでは無いか。其でも尙芝居の女のやうな態をせねば無作法だと謂ふなら、勝手にそんな法律でも出すがよい。

併し年を重ね月をへて、風俗が一定の範圍で變化をして居るのは、人が花などと同じからぬ快よい證明である。俗に三角とも稱する頭を包む帛は、紺が常の色で祭の日などには齡相當の色布を用ひたが、四五年以來頻りに白が賞美せられる。其はよいが今一步にして、手拭代用の姉さん被りに移つて行きさうな危険も有る。短い單の衣にも、白を好むものが北へ行くほど多い。黒の手無しを一樣に其上に着て、野路を群れて行くさまは繪であつた。下の裳にも今は紅を厭うて、濃山吹

に染めた若い女が多かつた。白い衣にも草の野にも、誠によく映える色合だ。還つて来たか萬葉集。環のやうに巡るから、流行も亦憎まれない。

足袋と菓子

草鞋足袋が破れて小石が入つて困るので、小本(ヲモト)の川口の部落で買はうとしたら、驚くべし紺絹キャリコの、小はせが金、かと思ふやうなのしか置いてなかつた。そんなら土地の人たちは、草鞋に何を穿くかと氣を附けて見ると、多くは素足であり、然らざれば足袋とも呼ぶ能はざるものを縛り附けて居る。全く此邊の者には足袋は奢侈品で、奢侈品なるが爲に此の如き、想像し得る限りの最も柔かなものを特に擇ぶのであらう。メリヤスの肌衣なども、夏の最中に裏毛ばかりを賣つて居る。同じ心理上の現象である。

木綿の歴史は日本では至つて日が浅いが、田舎の足袋の起原は其木綿が行渡つてから、又遙か後である。多くの農家にはまだ祖父曾祖父の革足袋が遺つて居る。革足袋も足袋の中だが、僅かに人間の足の皮の補助をするといふ迄で、汚さもきたなく、心を喜ばしむべきものでは無かつた。五尺三尺の木綿が始めて百姓の手にも入り、足袋にでもして穿かうと云ふ際には、やはり今日の絹キャリコに對するやうな、勿體なさと思ひ切りを、根が質朴な人だけに必ず感じ且つ樂んだことと思ふ。此點に於ては忍の行田も攝津の灘伊丹と、功罪共に同じと言つて宜しい。酒の個人的又は家長專制的なるに反して、菓子の流布には共和制の趨勢と謂はうか、少くとも男女同等の主張が仄見える。しかも若し年に一度のジャガタラ船が、壺に封じて砂糖を運んで來る世であつたら、寒い東北の浦々まで、微びたりと雖も蓬萊豆、蝕のりと雖もビスケットが、隈無く行渡り得る筈は無いのである。

盆の精霊に供へる蓮の花の形の菓子がある。米の粉で固めて紅と青とで彩色がしてある。試みに食つて見るに程よく甘かつた。臺灣が我が屬地となつた御蔭に亡者までが怡ぶ。況んや生きて且ついとをしい人々が、互ひに此文明を利用せんとしなかつたら、却つて不思議だと言はねばならぬ。

近頃の話である。或やさしい奥さんの宅へ、村でも瓢輕で知られて居る老人がいつになく眞顔で訪ねて来て、是非おめエ様に御ねげエ申してい事があると言ふ。此間隣の隠居の病氣が六つかしいと謂ふ頃から、折々頼みが有る／＼と言つて居たが、けふは酒の力を少しは借りたらしく、しかも尙唇を乾かして思ひ入つて話をした。

他の者に聞かせる。又何の彼のと評判にするからいやだ。親類でも無い者が見舞にも行かれぬが、をらあの御婆さんには子供の時、足袋を拵へてもらつてひどく嬉しかつたのが、今に忘れることが出来ない。何と一つ此菓子の袋を、そつと持つて往つて上げて貰へまいかと謂ふのである。

其が何でも死ぬ四五日前だつたさうである。枕元へ誰にも知らせずに菓子袋を持つて行き、靜かに此話をして聞かせる。さも嬉しさうな顔をして笑つたさうである。さうして大きな涙をこぼしたさうである。子供の時分の事だからよくは覺えないが、そんなことも有つたか知れぬ。何にしても御親切は誠に嬉しい。悦んで居たと言つて下さい。有難く御馳走になつて往くからと言つて下さいと謂つて、心から感謝をして居る様子であつたと云ふ。

お婆さんの亡くなつてから、あアは言つたが御菓子はごうなつたらうかと、其と無く氣を附けて見たが、終に其袋さへも見えず、又孫たちも一人も知つた様子が無かつた。多分は話した通りに、食べてしまつてから死んだことであらうと思

はれた。

濱の月夜

あんまり草臥れた、もう泊らうでは無いかと、小子内(ヲコナイ)の漁村に只一軒有る宿屋の、清光館と稱しながら西の丘に面して、僅かに四枚の障子を立てた二階に上り込むと、果して古く且つ黒い家だったが、若い亭主と母と女房の、親切は豫想以上であつた。先づ息を切らせて拭掃除をしてくれる。今夜は初めて還る佛様も有るらしいのに、頻りに吾々に食はず魚の無いことばかりを歎息して居る。さう氣を揉まれては却つて困ると言つて、ごろりと圍爐裏の方を枕に、臂を曲げて寝轉ぶと、外は蝙蝠も飛ばない静かな黄昏である。

小川が一筋あつて板橋が架つて居る。其板橋をから／＼と鳴らして、子供たち

が追々渡つて行く。小子内では踊はどうかね。はア今に踊ります。去年よりははづむさうで、と謂つて居る中に橋向から、東京などの普請場で聞くやうな、女の聲が次第に高く響いて来る。月が處々の板屋に照つて居る。雲の少しある晩だ。

五十軒ばかりの村だと謂ふが、道の端には十二三戸しか見えぬ。橋から一町も行かぬ間に、大塚かと思ふやうな孤立した砂山に突當り、左へ曲つて八木の湊へ越える坂に爲る。曲り角の右手に共同の井戸が有り、其側の街道で踊つて居るのである。太鼓も笛も何も無い。淋しい踊だと思つて見たが、略これが總勢であつたらう。後から来て加はる者が、ほんの二人か三人づつで、すこし永く立つて見て居る者は、踊の輪の中から誰かゝ手を出して、ひよいと列の中に引張り込んでしまふ。次の一巡りの時にはもう其子も一心に踊つて居る。

此邊では踊るのは女ばかりで、男は見物の役である。其も出稼からまだ戻らぬ

のか、見せたいだらうに腕組でもして見入つて居る者は、我々を加へても二十人とは無かつた。小さいのを負ぶつたもう爺が、井戸の脇からもつと歌へなどゝわめいて居る。どの村でも理想的の鑑賞家は、踊の輪の中心に入つて見るものだがそれが小子内では十二三迄の男の兒だけで、同じ年頃の小娘なら、皆列に加はつてせつせと踊つて居る。此地方ではちご輪見たやうな髪が學校の娘の髪だ。それが上手に拍子を合せて居ると、踊らぬ婆さんたちが後から、首をつかまへて何處の兒だか顔を見たりなんぞする。

吾々にはどうせ誰だか分らぬが、本踊子の一樣に白い手拭で顔を隠して居るのが、やはり大きな興味であつた。是が流行か帯も足袋も揃ひの眞白で、ほんの二人の外の外は皆新しい下駄だ。前掛は昔からの紺無地だが、今年初めて之に金紙で家の紋や船印を貼り附けることにしたといふ。奨励の趣旨が徹底したものか、近

所近郷の金紙が品切れに爲つて、それでもまだ候補生までには行渡らぬ爲に、可愛い憤懣が漲つて居ると云ふ話だ。月がさすと斯んな裝飾が皆光つたり陰つたりほんとうに盆は月送りではだめだと思つた。一の樂器も無くとも踊は眼の音樂である。四周が閑靜なだけにすぐに揃つて、さうしてしゅんで来る。

それにあの大きな女の聲の佳いことはどうだ。自分でも確信が有るのだせ。一人だけ見たまへ手拭無しの草履だ。何て歌ふのか文句を聞いて行かうと、そこら中の見物と對談したが、何れも笑つて居て教へてくれぬ。中には知りませんと謂つて立退く青年もあつた。結局手帖を空しくして戻つて寝たが、何でもごく短い發句ほごなのが三通りあつて、其を高く低く夜半まで歌ふらしかつた。

翌朝五時に障子を明けて見ると、一人の娘が踊は繪でも見たことが無いやうな様子をして水を汲みに通る。隣の細君は腰に籠を下げて、頻りに隠元豆をむしつ

て居る。あの細君もきつと踊つたらう。まさかあれは踊らなかつたらうと、争つて見ても夢のやうだ。出立の際に昨夜の踊場を通つて見ると、存外な石高路でおまけに少し坂だが、掃いたよりも綺麗に、稍楕圓形の輪の跡が残つて居る。今夜は満月だ。又一生懸命に踊ることであらう。

八木から一里餘りで鹿糠の宿へ來ると、爰でも濱へ下る辻の處に、小判なりの大遺跡がある。夜明近く迄踊つたやうに宿のかみさんは言ふが、どの娘の顔にも些しの疲れも見えぬのはきついものであつた。其から川尻角濱と來て、馬の食べ盡した廣い芝原の中を、くねり流れる小さな谷地川が、九戸三戸二郡の郡境であつた。青森縣の月夜では、私は又別様の踊に出遭つた。

(大正九年八月九月、東京朝日新聞)

清光館哀史

一

おとうさん。今まで旅行のうちで、一番わるかつた宿屋はどこ。

さうさな。別に悪いといふわけでも無いが、九戸の小子内の清光館などは、可なり小さくて黒かつたね。

斯んな何でも無い問答をしながら、うかくと三四日、汽車の旅を續けて居るうちに、鮫の港に軍艦が入つて來て、混雜して居るので泊るのがいやになつたと

いふ、殆ど偶然に近い事情から、何といふこと無しに陸中八木の終點驛まで来てしまつた。驛を出てすぐ前の僅かな岡を一つ越えて見ると、その南の阪の下が正にその小子内の村であつた。

ちやうど六年前の舊曆盆の月夜に、大きな波の音を聴きながら、この淋しい村の盆踊を見て居た時は、又いつ來ることかと思ふやうであつたが、今度は心も無く知らぬ間に來てしまつた。あんまり懐かしい。ちよつとあの橋の袂まで行つて見よう。

實は羽越線の吹浦象潟のあたりから、雄物川の平野に出て來る迄の間、濱にハマナスの木が頻りに目についた。花はもう末に近かつたが、實が丹色に熟して何とも言へぬ程美しい。同行者の多數は、途中下車でもしたい様な顔付をして居るので、今にどこかの海岸で、澤山にある處へ連れて行つて上げようと、つひ此邊

まで來ることになつたのである。

久慈の砂鐵が都會での問題になつてからは、小さな八木の停車場も何物かの中心らしく、例へば乗合自動車の發著所、水色に塗り立てたカフェなどが出來たけれども、之に由つて隣の小子内が受けた影響は、街道の砂利が厚くなつて、馬が困る位なものであつた。成程、あの共同井があつて其脇の曲り角に、夜ごほし踊り抜いた小判なりの足跡の輪が、はつきり残つて居たのも爰であつた。來て御覽、あの家がさうだよと言つて、指をさして見せようと思ふと、もう清光館はそこには無かつた。

まちがへたくとも間違へやうも無い、五戸か六戸の家のかたまりである。この板橋からは三四十間、通りを隔てた向ひは小賣店のこの瓦葺きで、あの朝は未明に若い女房が起き出して、踊りましたといふ顔もせず、畠の隠元豆か何かを摘

んで居た。東はやゝ高みに草屋があつて海を遮り、南も小さな砂山で、月などは丸で縁も無いのに、何で又清光館といふやうな、氣樂な名を付けてもらつたのかと、松本佐々木の二人の同行者と、笑つて顔を見合せたことも覚えて居る。

二

盆の十五日で精霊様のござる晩だ。活きた御客などは誰だつて泊めたくない。定めし家の者ばかりでごろりとして居たかつたらうのに、それでも黙つて庭へ飛び下りて、先づ亭主が雑巾がけを始めてくれた。四十少し前の小造りな男だつたやうに思ふ。門口で足を洗つて中へ入ると、二階へ上れといふ。豆ランプは有れども無きが如く、冬のまゝの圍爐裏のふちに置いてあつた。それへ十能に山盛りの火を持つて來てついだ。今日は汗まみれなのに疎ましいとは思つたが、他には

明るい場處も無いので、三人ながら其周圍に集まり、何だかもう忘れた食物で夕飯を濟ませた。

其うちに月が往來から橋の附近に照り、そろ／＼踊を催す人聲足音が聞えて來るので、自分たちも外に出て、ちやうど此邊に立つて見物をしたのであつた。

其家がもう影も形も無く、石垣ばかりになつて居るのである。石垣の陰には若干の古材木が、ごちや／＼と寄せかけてある。眞黒けに煤けて居るのを見ると、多分我々三人の旅人の、遺跡の破片であらう。幾らあればかりの小家でも、よくまあ建つて居たなと思ふほどの小さな地面で、片隅には二三本の玉蜀黍が秋風にそよぎ、残りも畠となつて一面の南瓜の花盛りである。

何をして居るのかと不審して、村の人がそちこちから、何氣無い様子をして吟味にやつて來る。浦島の子の昔の心持の、至つて小さいやうなものが、腹の底か

ら込上げて来て、一人ならば泣きたいやうであつた。

三

何を聞いて見ても只丁寧なばかりで、少しも問ふことの答のやうでは無かつた併し多勢の言ふことを綜合して見ると、つまり清光館は没落したのである。月日不詳の大暴風雨の日に、村から沖に出て居て還らなかつた船がある。それに此宿の小造りな亭主も乗つて居たのである。女房は今久慈の町に往つて、何とかいふ家に奉公をして居る。二人とある子供を傍に置いて、育てることも出来ないのは可愛さうなものだといふ。

其子供は少しの因縁から引取つてくれた人があつて、此近くにも居りさうなことをいふが、ごんな兒であつたか自分には記憶が無い。恐らく六年前のあの晩に

は、早くから踊場の方へ行つて居て、私たちは逢はずにしまつたのであらう。それよりも一言も物を言はずに別れたが、何だか人のよさうな女であつた婆さまは如何したか。こんな悲しい日に出會はぬ前に、盆に来る人になつてしまつて居たかごうか。それを話してくれる者すら、もう此多勢の中にも居らぬのである。

四

此晩私は八木の宿に還つて来て、巴里に居る松本君へ葉書を書いた。この小さな漁村の六年間の變化を、何か我々の傳記の一部分の様にも感じたからである。假に我々が引續いてこの近くに居たところで、やはり卒然として同様の事件は發生したであらうし、又丸々縁が切れて遠くに離れて居ても、ごんな出来事でも現れ得るのである。が斯うして二度やつて来て見ると、あんまり永い忘却、或は天

涯萬里の我々の漂遊が、何か一つの原因であつた様な感じもする。それはそれで是非が無いとしても、又運命の神様も御多忙であらうのに、此の如き微々たる片隅の生存まで、一々點檢して與ふべきものを與へ、若くはあればかりの猫の額から、元あつたものを悉く取除いて、南瓜の花などを咲かせようとなされる。だから誤解の癖ある人々が之を評して、不當に運命の惡戯など、謂ふのである。

五

村の人との話はもう濟んでしまつたから、連れの者のさしまねく儘に、私はきよとんとして砂濱に出て見た。そこには此頃盛んにとれる小魚の煮干が一面に乾してあつて、驚く程よくにほつて居た。その澤山の蕙の一番端に、十五六人の娘の群が寝轉んで、我々を見て黙つて興奮して居る。白い頬冠りの手拭が一樣に此

方を向いて、勿體無いと思ふばかり、注意力を我々に集めて居た。何とかして此人たちと話して見たら、今少しは昔の事がわかるだらうかと思つて、口實をこしらへて自分は彼等に近よつた。

玫瑰の實は村の境の岡に登ると、もう幾らでも熟して居ることであつた。土地の語では是をへエダマと謂ふさうで、子供などは採つて遊ぶらしいが、わざわざそんな物を探しに遠方から、汽車に乗つて來たのが馬鹿げて居ると見えて、あゝへエダマかと謂つて、互ひに顔を見合せて居た。

此節は色々の旅人が往來して、彼等をからかつて通るやうな場合が多くなつた爲でもあらうか。うつかり眞に受けまいとする用心が、さういふ微笑の蔭にも潜んで居た。全體に聲にも表情にも、前に私たちが感じて還つたやうなしほらしさが、今日はもう見出され得なかつた。

一つにはあの時は月夜の方であつたかも知れぬ。或は女ばかりで踊る此邊の盆踊が、特に昔からあゝいふ感じを抱かしめるやうに、仕組まれてあるのかも知れない。六年前といふと此中の年がさの娘が、まだ踊の見習ひをする時代であつたらう。今年が好いから踊をはづませようといふので、若い衆たちが町へ出て金紙銀紙を買つて来て、それを細かく剪つて貼つてやりましたから、綺麗な踊り前掛が出来ました。それが行渡らぬと言つて、小娘たちが不平を言つて居りますと、清光館の亭主が笑ひながら話して居たが、あの時の不平組も段々に發達して、もう踊の名人になつて多分此中に居るのだらう。

成程相撲取りの化粧まはし見たやうな前掛であつた。それが僅かな身動きのたびに、きら／＼と月に光つたのが今でも目に残つて居る。物腰から察すればもう嫁だらうと思ふ年頃の者までが、人の顔も見ず笑ひもせず、伏し目がちに靜かに踊つて居た。さうしてやゝ間を置いて、細々とした聲で歌ひ出すのであつた。たしかに歌は一つ文句ばかりで、それを何遍でも繰返すらしいが、妙に物遠くて如何に聴き耳を峙てゝも意味が取れぬ。好奇心の餘りに踊の輪の外をぐる／＼あるいて、そこいらに立つて見て居る青年に聞かうとしても、笑つて知らぬといふ者もあれば、ついと暗い方へ退いてしまふ者もあつて、到頭手帖に取ることも出来なかつたのが、久しい後までの氣が／＼であつた。

六

今日は一つ愈々此序を以て確かめて置くべしと、私は又娘たちに踊の話をした。今でも此村ではよく踊るかね。

今は踊らない。盆になれば踊る。こんな軽い鬪弄を敢てして、又脇に居る者と

顔を見合せてくつ／＼と笑つて居る。

あの歌は何といふのだらう。何遍聴いて居ても私にはどうしても分らなかつたと、半分獨り言のやうに謂つて、海の方を向いて少し待つて居ると、ふんど謂つたゞけで其間には答へずに、やがて年がさの一人が鼻唄のやうにして、次のやうな文句を歌つてくれた。

なにヤとやれ

なにヤとなされのう

あゝやつぱり私の想像して居た如く、古くから傳はつて居るあの歌を、此濱でも盆の月夜になる毎に、歌ひつゝ踊つて居たのであつた。

古い爲か、はた餘りに簡単な爲か、土地に生れた人でも此意味が解らぬといふことで、現に縣廳の福士さんなども、何とか調べる道が無いかといつて書いて見

せられた。どう考へて見たところが、是ばかりの短かい詩形に、さう六つかしい情緒が盛られようわけが無い。要するに何なりともせよかし、どうなりとなさるがよいと、男に向つて呼びかけた戀歌である。

但し大昔も筑波山のかがひを見て、旅の文人などが想像したやうに、此日に限つて羞や批判の煩はしい世間から、遁れて快樂すべしといふだけの、淺はかな歡喜ばかりでもなかつた。忘れても忘れきれない常の日のさま／＼の實驗、遣瀨無い生存の痛苦、どんなに働いても尙迫つて來る災厄、如何に愛しても忽ち催す別離、斯ういふ數限りも無い明朝の不安があればこそ、

はアごしよぞいな

と謂つて見ても、

あア何でもせい

と歌つて見ても、依然として踊の歌の調は悲しいのであつた。

七

一たび「しよんがえ」の流行節が、海行く若者の歌の囃しとなつてから、三百年の月日は永かつた。如何なる離れ島の月夜の濱でも、燈火花の如く風清き高樓の欄干にもたれても、之を聴く者は一人として憂へざるは無かつたのである。さうして他には新たに心を慰める方法を見出し得ない故に、手を把つて酒杯を交へ、相誘うて戀に命を忘れようとしたのである。

痛みがあればこそバルサムは世に存在する。だからあの清光館のおとなしい細君なども、色々として我々が尋ねて見たけれども、黙つて笑ふばかりでどうしても此歌を教へてはくれなかつたのだ。通りすがりの一夜の旅の者には、假令話し

て聴かせても此心持は解らぬといふことを、知つて居たのでは無い迄も感じて居たのである。

(大正十五年九月、文藝春秋)

津 輕 の 旅

又五月になつた。此二階の窓から見える吉野櫻などは、はや既に黒ずんだ深緑になつて、寧ろすがくしい鄰の梅若葉を羨むかの風情であるが、津輕の山々では是からまだ半月もたつてから、やつと雪の間の山櫻が咲くのである。私が青森大林區署の官用軌道の輕便に乗せて貰つて、十三潟の淋しい岸から、荒れた昔の港を見に行つたのは、たしか一昨年の此月二十七日の雨の日であつた。相内の宿屋では地竹の筍の煮たのを肴にして麥酒を傾けた。小泊から松前へ渡る船の航路

が絶えてからは、もう大分久しいことになる。さうなれば此邊は用も無い荒濱であるから、町場が只の村よりも尙森閑となるのにも不思議は無いが、それにしても驚くのは、古來音に聞えた十三の湊の變り様である。

亡くなられた和田雄治さんの話であつた。以前朝鮮で海流の試験をする爲に、何度か處々の岸から空纜を流して見たことがあつたが、いつでも多くはこの津輕西岸の潟の口に近く、漂著する結果を見たといふことである。日本海周邊に住む民族の、船を扱ふ技術がまだ十分に發達しなかつた大昔から、爰は自然に開けたる水陸出入の衝であつた。ところが人間の智能は怖ろしいもので、僅かに木屑を焚くやうな小さな汽動車が山を横ぎつても、それが十三潟の岸の林の木材を、陸で青森の方へ運び出すことになる。もう十三の浦へは一艘も船が來ぬやうになつてしまつた。此海の口の荒いのは昔からのまゝだらうが、港の燈の舟人を招く

力が次第に弱く、一つには又和船の船子までが烈しい労働をいやがり、日數を切りつめて上手に仕事を取る風になつた爲もあらう。

津輕を今の五郡に分けたのはいつ頃からか知らぬが、北津輕郡の南西の境は、確かに最初は十三潟の水戸口であつたに相違ない。それが水筋の變化を経たこと見えて、今では四五町も隔たつた砂濱の中に、何の附きも無く郡境の榜示杭が立つて居る。此邊は殊にいつも強い風の當る處で、砂除けに栽ゑられた黒松の林が、殆ど成長して居る暇も無かつたらしく見える。處々に薄紫で形の菊に似た花が低く咲いて居る。土地で何と謂ふか尋ねて見る人も居なかつたが、關西で吾妻菊東國で蝦夷菊といふものと、色も形も略同じで、あれよりも遙かに姿が弱々しく、地を去ること僅かに二三寸、青い空を眩しがり、海の音に聴き入るやうな花であつた。

港の前面はたゞ一列の砂の堤であつた。白い濤が絶えず之を越えて居る。其内側に太い綱を張り、之に由つて辛うじて渡船を通はせて居る。荒い西北が一日半夜も吹き續けると、水戸口の砂は忽ち山になつて、潟の内水は水嵩を増し、岩木川の落ち口から、左右一帯の新田場は水の底になるので、多くの人夫が危険を冒して、何でもかでも此砂山を切りに来なければならぬ。それを見張りの番小屋が北の岸にはあつて、電話を引き信號の旗を具へてある。青森から来て居る若い技手は此日留守であつて、其弟が一人で本を讀んで居た。黒い小猫を飼つて居る。

小屋の片隅の石垣の下には、二尺三尺の流れ木が拾ひ集めて岡の如く積んである。それを見るときすぐに東遊記などの雁風呂の話が想ひ出される。この邊の海邊から漂うて来たものか。是も近世の隨筆にはよく書いてあるが、不謂蛾眉山下の橋柱だの、天下地上の大將軍の粗彫の木像などは、何れも咸鏡道あたりの低地か

ら出たものらしく、何度となく爰から南の濱の村でも拾はれたのである。そんなものは無いかと氣を附けて居るうちに、ふと目に入つたのは一個の泛子(アバ)である。一方に南秋田郡男鹿何々村の文字が幽かに見え、他の面には海上安全漁村繁昌云々と書いてある。男鹿も爰からでは四十里近くの南である。棄てたか流したか主ともに見失うたか、元の地の人たちは斯うして私が拾うて還つて、朝晩見守つて居ることも知らないのである。

此渡し場からは雪の岩木山が真正面に見える。寂しい十三湊の民家は、悉く白い大きな山の根に抱へられて、名に高い屏風山保安林の常磐木の緑が、僅かに遠い雪と近い砂山との堺を劃して居る。母から昔聽いた山莊大夫の物語、安壽戀しや津志王丸の歌言葉が、圖らずも幼ない頃の悲しみを喚び還した。姉の安壽は後に來て此山の神となつたによつて、丹後一國の船は永く津輕の浦に入ること許

されなかつたといふことも、爰に来てあの御嶽の神々しい姿に對する迄は、明らかに其來由を理解し得ないであらう。越後佐渡から京西國にかけて、珍らしく廣い舞臺をもつこの人買ひ船のローマンスは、要するに十三の湊の風待ちの徒然に遊女などの歌の曲から聴き覺えたものに相違ない。さうして其感動を新たに花やかな言の葉に裝うて、次々に語り傳へた女たちも、亦久しく國中を漂泊して居たのであつた。

しかもその千年來の戀の泊りが、今や眼前に於て一朝に滅び去らんとして居るのである。一しよにあるいて居た遠藤技師の話でも、三四年前にちよつと來て見た時には、町の兩側の何れの家からでも、なまめいた女の聲の聞えぬ家は無かつた。黄昏前には美しい燈を點じて、笑つたり歌つたりする者が、元は何百人と無く遠い國から入込んで居た。よく昔から十三の七不思議など、稱して、田は無け

れども米が出る。父は無くても子が生れるなど、色々笑ふやうな話の種は多かつたものだが、材木を積む船が青森の方へ廻るやうになつては、忽然として悉く覺めたる夢になつてしまつた。今ではその米が出ない爲に、町の男たちは聞いたことも無い國までも出稼ぎに行き、老いたる者が潟に出て少しづつ、の漁をするやら、村には薪山を持たぬ爲に舟渡しを越えて二里三里、北津輕の山に小柴を探らせて貰ひに行く。あれ今の渡し舟でも山行きの女が、あんなにして遣つて來ましたと謂つて見て居ると、きたない頬かぶりをして、小さな連尺のやうなものを脊に負ひ、身には刺子のどんつくの縞目も見えぬものを著ふくれて、まるでエスキモーの奥様のやうなのが六七人、何やらがや／＼と話をして船を下りて行く。是がこの色の湊の十三の町の人とは、昔ならば誰が思はう。やがて今見て來た松林に隠れ、それから野菊の咲く砂山を越えて行く。其後姿は殊に物哀れで、立小便

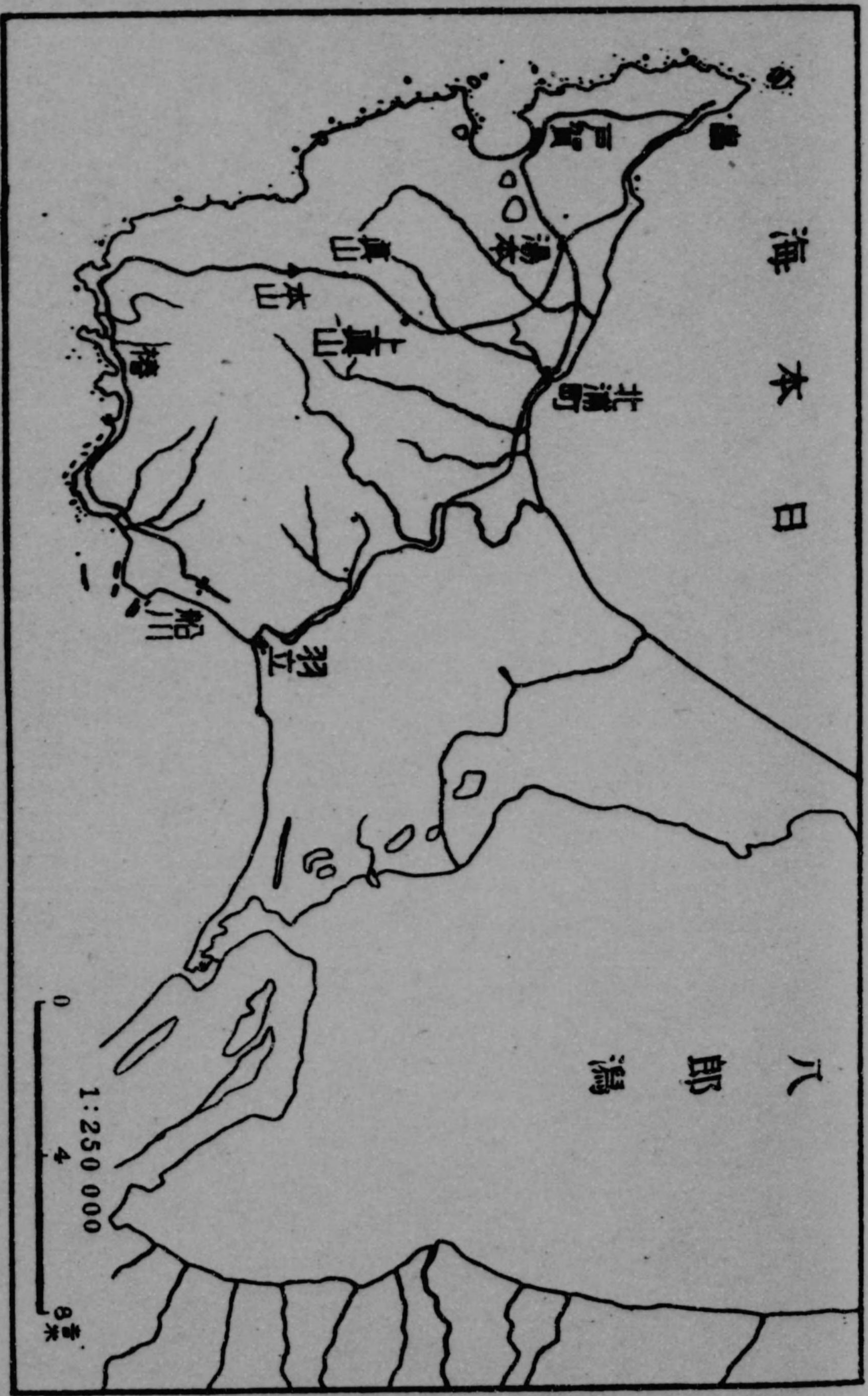
などをして行く様子までが詩であつた。

久しく渡頭に立ち盡して後に、自分たちも舟に乗つて、荒い水戸口を南へ渡つた。さうして雨あがりの水溜りを飛び越えながら、荒れたる町の様子を見てゐた。五月も早末であるのに、この家も冬のまゝの大戸を卸し、雁木の下の通りを左右に覗いて見ても、一人も通る者が無い。物賣る店にも色ざりになるやうな品物は少なく、町には僅かの鶏が遊んで居るだけで、犬猫の影も見かけない。もう既に荒れてしまつたのである。

十三から木造の町の方へ行くには、屏風山下の路を四里餘りも通るのである。左手に湖水と其岸の新田とを見下して、晴れたる夕日の影には快活なる風景である。ヤチワタ又はサルケと稱して泥炭を掘り上げ、冬季の燃料に乾し貯へて居る村が多い。南受けの温かい土地である爲か、此邊は對岸北津輕の山と違つて、櫻

などはとくに散り、處々に老松が濃かな樹蔭を作るやうな日の光であつた。重い荷物を手車で運ぶ人たちは、裸で一枚の狗の皮を脊にあて、働いて居る。それだのに目と鼻の間の十三の浦では、今にあのやうな寒さうな暮し方をして居るといふのは、或はとくの昔に春の季節を費し盡したのでは無からうかと、考へて見たことであつた。

(大正七年五月、同人)



をがさべり

(男鹿風景談)

山水宿縁

この間信州へ行くつもりで、中央線の二等車に一人をさまつて居ると、飄然として樞密院の内田伯が入つて來られた。所謂微行で富士の五湖巡りをするのだといふ話である。

内田さんは今でも旅行が一番好きださうだが、永らく外國にばかり暮して居たので、まだ一向に日本の山水には親しんで居ない。小佛を晝間越えるのは是が始

めてだと言つたり、馬入川を見て何といふ川かなど尋ねられる。

そこで私のよく無い癖が始まつて、頻りに近頃あるいて見た方々の新地名をならべて、風景鑑賞の意見を押賣しようとする、是はまた意外な話、うん男鹿かね。男鹿なら僕も行つたことがあるよと言ふ。

併し幸ひなことに、それは今から四十三年ほど前のことであつた。常節は汽車が出来たといふことだが、終點は何といふ町かなごと、船川の人が聞いたら頗る心細がりさうなことばかり言つて居る。

まだ學校に居た時分のことださうな。町田(忠治氏)が病氣をしてちつとも出て来ないから、引つぱり出しに出かけて、暫らくあれの家に世話になつて居た。其間に一人で男鹿に遊びに行つた。山は三つとも登つて見たといふ。

随分元氣のいゝ痛快な旅行であつたらしい。途中までは會津に歸る林權助氏な

ごも一緒であつた。汽車のまだ無い時代の長い道中を、内田さんは草鞋といふものを履かない主義であつたさうな。男鹿の本山にも下駄ばきで登つたのである。

山では路がわからなくなつて大きに弱つた。併しごつちみち海岸には出るにきまつて居ると思つて、構はずにぐんぐ降りて行くと、果して里があつて多勢の女が田の草を取つて居たが、何を尋ねても一言も通じないので、是には却つて閉口をしたと言つて居る。

さう聞くと何か男鹿の農民が、この未來の名士に對して相濟まなかつたやうに聞えるが、なアに、内田さんも熊本縣出の書生さんだつた。言語不通の責任は五分五分であつたらうと思つてをかしかつた。

私は先月男鹿から歸つて来て、もう大分多くの友人にあの山水を説法した。自分としても内田さん同様に、まだ四十年ぐらゐは持ちさうな印象がある。特に日

記を書いて置く必要は感じないのだが、あんまり此奇遇が面白いので、秋田人の所謂「ながさべり」をして見る氣になつたのである。

それには今一つあの半島の風景に對して、氣の毒に感ずる理由もあるのである。今度或社の八勝選定に際して、土地の人たちが天然を讚美する方法を知らぬばかりに、受けずともよい冷遇を受けることになつた。思ふに日本の旅行道は是からまだ大いに進歩するであらう。それを待つ間の退屈を紛らす爲には、やつぱり我も何か餘分のおしやべりでもして居るの他は無いのである。

風景の大小

男鹿に若い旅人の興味を引き付けることは、些しでも面倒な仕事では無い。第一に地圖なら如何に粗大なるものを見ても、直ぐにあの地形の尋常で無いことだ

けは察せられる。即ち男鹿は出雲風土記の國牽き神話にある通りの、神によつて繋がれたる島であつたことが分るのである。

汽車で由利から河邊郡の海岸を走つて居るときでも、窓からたゞ海の方を眺めて居るのみで十分である。大抵の人なら思はず名を尋ね、それから行つて見たくなるやうに、山の姿が最初から出來て居るのである。

能代から鱒ヶ澤への鐵道が今少し延長すると、此引力は更に一段と強くなる見込がある。男鹿の高地の變化は北磯に面した方が複雑であり、海を抱へた水際の曲線も、此側の方が殊に美しいのである。此半島などは一度近くに寄つて地形を知つて後は、何度でも遠望して其美を味はひ得る風景である。それを風景とは掌に載せて賞翫すべきものゝやうに考へた人々が、やたらに岩や洞穴に名を付けて好んで山水を小さくしたのである。

自分は今から八年前の初秋に、一人で西津輕の濱を南に向いてあるいたことがある。大間岬の突端に来て一つ曲ると、背後の松前の山々と小島大島とは隠れてしまつて、忽ち男鹿の神山が沖遠く現れて来る。深浦岩崎森山のあたり迄来るともう七里の長濱が波の上に浮かんで見える。珍しく伸びくとした外線である。天衣無縫といふやうな語が思ひ出される。即ち又浦人等が神仙の居を想像して、登つて拜せざるを得なかつた動機である。

尤も自分一人としては、此以外にも因縁は尙色々あつた。例へば此時よりも更に四年前に、十三の湖口の砂濱に立つて、水戸口の番屋の軒の下に、大小の流木の積上げてあるのを見て、昔の雁風呂の話などを思ひ出して居ると、ふと其中から一尺ばかりの、文字を書いた板切れを見出した。今でも記念にして家にあるがそれは男鹿の漁船の網のアバであつて、海上安全戸賀港何の某とある。其時から

して戸賀へは是非往つて見たいと考へて居たのである。

併しそんな特別の理由などは無くとも、津輕の西濱を汽車が走り、汽車に人が乗り其人に用の無い旅をするだけの餘裕があつたならば、足は自然に此半島の岸に向つて、來すにはしまはないだらうと思ふ。つまり男鹿の人たちは、今少し待つて居りさへすればよかつたのである。

全體風景に甲乙何れか優るなどいふ問題はあり得ない。一方に親しい人は通例他方には疎く、始めて見て珍しいと思ふ心は、やがて見馴れたものを平凡に感ぜしめる。最初から判定者の資格ある者が甚だ稀なのである。さうして男鹿の如きは珍しと言つて來た者が既に少なく、親しみを感し得る人も亦あまりに少ないのであつた。それが又果して悲んでよいか否かも、實はさう容易に答へられる問題では無いのだが、自分としては同じ心持を以て此山水を愛し得る者が、今少し

は増加する事を祈つて居る。それが又こんな話をして見ようとする動機である。

半島の一世紀

昭和三年の七月は菅江眞澄翁の百年忌に相當する。故に自分は先づ秋田人に向つて、この遠來の詞客の男鹿紀行四篇を、一つには男鹿の山水の供養の爲に、刊行することを勧めたいのである。

眞澄翁は最後に秋田の地に入つて落付くより十五六年も前に、多分は寒風山の麓を過ぎて、椿岩館から津輕の木蓮子に、海傳ひに入つて居る。それから久しい間岩木山周圍の村里を吟行した。故に屢々西津輕の浦人の男鹿の靈山を説くのを聞いたのみならず、自身も又折々は海波を隔て、遠く朝夕の峰の色を眺めて居たことゝ思はれる。

乃ち山本郡の海近く又八郎湖の岸の村に居た頃、僅かな歲月の間に三たび迄杖を半島の地に曳いて、具さに四時の變化を記述した因縁であつたらう。是が尋常の遊歴文士の勉強した風流でなかつたことは固よりである。現に彼が世を去つてから百年になるけれども、何等の郷土愛も未だ寸分の親切を以て、彼が述作に加ふることを得なかつたのである。

蓋し旅行は技藝であると同時に、又一種の修養であり研究であつた。伴を誘ひ酒を載せて、搖蕩して漸く到るといふ類の遊覽者に、歸つて人に傳ふべき何物も無いのは當然と言つて宜しい。此種たゞ評判の名所舊跡ならば、列擧する迄も無く既に煩はしいほど日本には充ちて居る。もとゞ骨惜しみの見物左衛門である以上は、成るべく京阪近くの汽車近くの、行き易いので間に合せようとするだらう。そんな御客の爭奪に失敗したことは、却つて男鹿の爲にも結構であつたかも

知れぬ。

眞澄翁の時代に比べると、男鹿の如き世に遠い半島でも、やはり目に付く程の變遷があつた。其變遷を靜かに考へて見ることは、恐らく此地を訪ふ者の最初の興味であつて、其爲にも亦前に遊んだ人の筆の跡は、遺すばかりで無く得やすいものにして置きたいと思ふのである。

そこでまづ持前の多辯を弄するが、ヲガといふ地名の今も存するのは、第一には筑前の岡の湊、即ち蘆屋を中心とした現在の遠賀郡の海角である。陸前の牡鹿郡は久しくヲシカと訓み、鹿が多かつた故と説明せられて居る。成程それも確かな事實で、獨り金華山の神社に此獸を放養するのみならず、土中の古物にも角器骨器の鹿に屬するものが至つて多い。併しそれは單に後に牡鹿といひ男鹿といふ漢字を宛て始めた理由といふばかりで、ヲカといふ名は三ヶ所共に、海に突き出

した地であるのを見ると、陸地を意味するヲカが元であつて、海角なるが故に最も早く目に入つた陸地、即ち海上に在る者の命名する所であり、従つて海から植民せられた土地と見てよいやうに思ふ。

海的路絶えたり

ヲガが海から見た陸地のことであつたとしたら、其名を承け繼いで居るからには、當初確かに海の人が、上陸して住んだことになるのであるが、其末々は今どうして居るであらうか。

思ふに幸ひにして其血は濃く流れて居るにしても、職業は必ず幾たびと無く變つて居る。現在海で働いて居る人々の、多くは近世の移住であることは、尋ねて見れば直ぐに知れることで、男鹿の最初の開發は、無論それよりも遙かに古い話で

あつた。

島が追々と主陸に繋がつて来たやうに、人と土地との因縁も、常に内の方へばかり伸びて行く習である。海の路は茫洋として早く忘れ易い。足跡を踏んで嗣いで来る者が無ければ、故郷の懐かしさも孫の代までは傳はり得ない。だから若し小さく團結して自ら守ることが難いとすれば、内に向つて平原の統一に、加盟するの他は無いわけである。初期の男鹿人は恐らくは寂しく、且つ忍耐深かつたであらうと思ふ。

しかもそれは島國の古今を一貫して、避くべからざる生活の關門であつた。我民族の妥協性、若くは事大性とも名づくべきものも、斯うして海を越えて異郷に移る人々の、必要が之を養つたのであつた。他の一方には又新しい職業を選定して、ごし／＼と境遇を支配して行く力も、やはり此原因から古來の我々の長處

とならなければならなんだ。男鹿は偶々地形の然らしむる所、言はゞ其試験場の一つに供せられたといふ形であつた。

前代の歴史は甚だしく埋もれて居る。二三保存し得たる闘争の記録の如きは、到底黙々たる千年の推移を、窺ひ知らしむるに足らぬのであるが、凡そ此半島の舊姓門閥と稱せられた家々は、夙に利害の衝突を見て互ひに相傷けて滅び又は衰へてしまつた。天然の恩恵にも制限があつて、兩立して共に榮えることが六つかしく、其上に外部勢力の干渉も繁かつたであらうが、今一層根本の原因といふのは、言はゞ此地には争奪に値する中心の利益があつたことで、即ち曾て大に榮えたが爲に、後衰へ又は亡びざるを得なかつたとも言へるのである。

その中心の主要なる力の一つは、恐らく赤神山の信仰であつた。奥羽の靈山では此半島に限らず、比叡佛教の影響を受けぬもの無く、現存の縁起は各地殆ど皆

慈覺大師の經營を説くけれども、それは概して後世の假托であつた。孤立少數の外來部曲が、山水の形勝に據つて新宗教を宣傳することは、最も普通なる彼等の保護策であつたから、是も亦當初は男鹿人の地方神の、強く附近の農村を威壓したものであるかと思ふ。

それが頻々たる動亂の結果を受けて、殆ど其由來を説明すべき何等の史料をも保存せず、近代僅かに一期の隆盛を経た後に、再びまた今日の衰微を見たのである。男鹿の美しく明るい風景の底には、斯ういふ人生の常とも言ひ難い程の、烈しい有爲轉變が潜んで居るのである。

本山眞山の争

是ほど秀麗なる山水の間に在つて、人が尙争つたといふことは不思議なやうで

あるが、男鹿の南北の生活利害は、實は寧ろ餘りに有力なる中心あるが爲に、昔も今の如く早くから調和の困難を見たのである。似たる先例を擧げるならば大和の大峰を中にした熊野と吉野、是などは神武御東征の大昔から、既に後代の本當二派の山伏の對立が、豫期せられて居たと謂つてもよい位である。

近世に入つては富士も白山も、各之に近い抗争があつた。大よそ靈山の信仰にして、所謂先達の職分の重んぜられる場合には、二つ以上の登り口の互ひに競争の相手方を否認せんとするは自然であつて、その根元の動機は決して利慾のみでは無かつた。

しかも結局は個々の神人の家の活計が、是非とも他の一方の屈服を條件として始めて安全なりといふ程度まで發達する故に、末には苦しまぎれに外部の擁護干渉を導いて來て、却つて固有信仰の純なる姿を、改めることをさへ憚らぬやうに

なつたのである。

永い年月の間には屢々不完全なる和睦があり、或は一方の一時的敗北もあつたさうして其度毎に、故意に以前の事情を忘却せしめようとしたのである。男鹿では北磯の側からの登り口を、今では真山といふ名前に確定して居るが、本山の方の舊誌には新山とも書いて居る。真山なる文字の如何にも後になつて考へ出したらしいのを見ると、或時代之を新山と呼ばしめて居たものが、後再び分立したところだけは推測し得るが、果してその新山が最初からの呼び方であつたか否かは餘程疑はしい。山では熊野の本宮新宮の關係と同じと謂ふけれども、彼と是とは又事情が別なやうに思ふ。

真山の方では光飯廢寺の元の庭に、中興大師の御手栽と稱する榎の大樹が、依然として大いに茂り榮えて居る。或は慈覺その人よりも尙古いかと思ふ名木で、

その在る場處も遠近の海を見晴らし、偶然に生長したものでは勿論無い。此だけを見ても、所謂新山の主張の新儀で無かつたことは領かれる。しかも他の一方には本山の門前の濱を控へ、五社の社殿は正式に南面して、尤も自然の登山口であつたことを、地形が明白に證據立て、居るのである。

つまりは唯一つの尊き神、一つの天に近き高峰に對して、周圍の麓の里に住む者が、等しく熱烈なる信仰を寄せて居て、最初から之を或中心に統一することが困難なる形勢に在つたのである。加賀の白山なども事情は頗る是に近く、出羽では又羽黒の三山の如きも、此混亂の爲に終に自ら其歴史を述べることさへ出来ぬやうになつた。しかも其鬭諍に參與した家々は、敵も味方も公平一様に衰へ盡し今は却つて稍不純なる原始信仰が、放任の結果として再び平民の間に、復活することになつたのである。

男鹿では足利時代の終りに近くなつて、本眞二山の社僧が相前後して、眞言山伏の宗派に轉屬したことがあつた。其動機は恐らくは政治的のものであつて、之に伴なうて麓の住民に取つて、不必要なる色々の改革が行はれたやうに見える。例へば漢の武帝だの蘇武だのといふ物々しい縁起は、上古以來のナマハギの信仰を、大切に持ち傳へた素朴なる村人に向つては、餘りにも縁の乏しい外國文學の應用であつた。

正月様の訪問

斯んな話は風景と縁が無い。又旅人の關知する所で無いと、言ふ人も有りさうであるが、自分等としては男鹿が鹿の居る島であつたと共に、更に又正月十五日のナマハギの故郷であつたが故に、その天然に一段と深き懐かしさを覺えるのである。

ある。

土地の人の直話では、男鹿のナマハギは近年もう著しく衰へたといふことである。そんなに意味のあるものなら、如何にかして今一度復活させようかと言つて見たところで、本來信仰に固い基礎をもつた風習である以上は、形態ばかりを眞似て見たのでは、徒らに好事なる少數者の趣味を満足させるだけであつて、前代を理解するたそくにはならぬ。やはり黙つて自分等の饒舌を、聽いて居るより他はあるまいと思ふ。

太平洋に面した奥州の一部では、この小正月の晩に来る蓑笠の神様を、ナゴミタクリ又はヒカタクリと呼び、やはり怖ろしい聲をして手には小刀を携へ、それを筒やうの器に入れて、がらくと鳴らして来る村もある。ヒカタは東京などで「火だこ」ともいふもので、火にばかり當つて居る者の肌膚に出来る斑紋、即ちな

まけ者の特徴である。タクルとは即ち剝ぐことであつた。火だこの出来て居る皮を剥いで遣らうと稱して、小刀を鳴らして夜來るので、要するに信越地方などでいふヅクナシに對しての、神聖なる一つの脅迫である。

ナマハギのナマも同じく「火だこ」のことで、又ナマケ者のナマとも關係が有るやうに思ふ。ナゴミといふのも亦それらしいが、閉伊郡の海岸の人は、それを化け物のことだと私に教へてくれた。或はそのナゴミタクリが、こわい聲でモーと謂つて來る故に、之をモーコと稱し又一般に化け物をモーコと謂ひ、蒙古人のことだと説明した物知りさへあつた。言ふことを聽かぬ小兒が大いに嚇され、親の仲裁によつて辛うじて宥してもらひ、おとなしく其晩は寝ること、子供の無い家でも色々六つかしい文句を述べ、後に酒を出されて假面の下から飲むことなど、閉伊のナゴミも男鹿のナマハギもよく似て居て、其時期はどこの國でも、必ず正

月十四日の深夜に限られて居る。即ち是が本來我々の年の神の姿であつたのだ。

舊仙臺領から南へ行くと、來るには來るが女子供は畏れない。たゞ目出たいことばかり述べ立て、餅や酒を貰ふことにのみ熱心である。半ば以上も遊戯化して居るから、眞面目な好青年は此役に份することを悦ばぬが、顔を隠し作り聲をして、同じ日の夜來ることだけは一樣である。それを宮城縣の北部ではサセドリ南の部分ではカセドリとも謂ふやうである。

津輕でカバカバといふのも同じ式ではあるが、此も今は主として小兒の事業になつて居る。福島から會津にかけてはチャセンゴと謂つて居る。關東平野の一部ではタビタビ、中國の多くの縣ではホトホト又はコトコト、是は戸を叩く音を意味して居る。戸は叩かずに今では口でさういふのみである。瀬戸内海の西部から土佐にかけては之をカユヅリと稱し、九州に入ると再び又トビトビ若くはタメタ

メと謂ふさうだ。トビもタビも共に「給へ」即ち下さいといふことを意味する。もう此方面では單なる物貰ひに近く、従つて小兒ばかりが之に參與する故に、小學校ではやかましく之を制止する。

ところが海を越えて遙か南の、八重山群島の村々に於ては、又北の果の男鹿半島と同じやうに、至つて謹嚴なる信仰を以て、之を迎へて一年の祝ひ言を聴かうとする習がある。此ことは曾て海南小記の中に些しばかり述べて置いたが、其は變化の色々な階段が地方的に異なるといふのみで、本來一つの根原に出づることは、比較をした人ならば疑ふことが出来ぬ。即ち一年の境に、遠い國から村を訪れて遙々と神の來ることを、確信せしめんが爲の計畫ある幻しであつた。さうして男鹿人の如きは當然に彼等のナマハギを、靈山の嶺より降り來るものと認めて居たが故に、この深い山水因縁が結ばれたのである。

二人の山の鬼

男鹿のナマハギがもと赤神山の五人の鬼と、關係のあつたことは想像し得られる。大和の吉野山を中心として、全國に宣傳せられた修驗道が、佛教以前の根源をもつことは證明に難くないのだが、此信仰にも亦五鬼と名づけて、神に仕へる善鬼即ち護法神があつた。それが人間に住して山伏の元祖となると傳へて、山伏の家も通例は五流に分れて居た。それ故に男鹿の本山でも、五人の鬼を説き立てたのであらうが、五鬼とはいふが男鹿の方では、ミケンとサカツラとは夫婦の鬼であつた。それが死んで後に眼光と首人と押領との三鬼が、出て來たやうに傳へて居るのは異様である。恐らくは別系統の沿革があつたことゝ信ずる。

さうすると本山永禪寺の柴燈堂に於て、毎年正月の十五日の日に、山から降り

て来る神人に、堂の中央の窓から餅を投げて與へたといふ儀式、及び何人も其姿を見ることを許されず、若し誤つて之を見れば、必ず其人に災あるべしと言つた話も、後世の社僧たちが尙或程度にまで、山の傳統を承認した痕跡であるといふことが出来る。

佛法では直ぐに薬師觀音の化身といふことにしてしまふが、所謂異人の靈山に住むと信せられたのは、常に佛法以前からのことであつた。或は山の神であり、開山の名僧に地を譲つた地主神であり、又時としては案内者の獵人であつたものが、大抵は大師の法力に心服して、祀られつゝ寺の守護に任じて居るやうに、説明するのが寺々の縁起ではあつた。併しながらそれは必ずしも、土地の住民の父祖から告げ教へられた所と、一致しては居ないのであつた。

男鹿と似たやうな例は東北の名山に幾らもあるが、近くは津輕の岩木山でも、

山の神は安壽と津志王との姉弟で、岩木判官正氏の子であり、津輕伯爵家の先祖を助けたのは、卍字と錫杖との二足の鬼、山中赤倉の巖窟に今も住むといふのは二人の巨人といふやうに、話は幾組にも分れては居るが、根本はたゞ一つで、解釋のみが色々になつて居るのである。畢竟するに最初其類の言ひ傳へが存在しなかつたら、後に乗込んで來た新宗教も、斯くまで由來記の編述の爲に、苦心結構するの必要は無かつたのだから、尙信仰の基礎は土民の間に、在つたと見て差支が無いのである。

だから男鹿でも歴代の爭奪を経て、南北の登山路の寺社は、既に他國の客僧等に占領せられたけれども、尙其麓の里毎に古來の土を耕す農民等は、各自の最も大切とするものを持つて、彼等とは一旦の縁を切つたのである。しかも山の天然との斷つべからざる聯絡は、年々のナマハギに份する青年が之を掌どり、他の府

縣に在つて多くは形式化し遊戯化したものを、爰には略元の姿を以て、最近まで保存して置いてくれたのである。

男鹿は此意味に於て、殊に旅人の爲には懐かしい昔の國である。海から來た人が土を拓いて武士と爲り、山に遊んで獵者と爲り、神を感じて熱心なる風景の愛護者と爲つた結果が、各々我生活の價値を高く評價して、それに相當する利得を要求し、やがては鬭争して相滅さざるを得なくなつたのである。悲壯なる日本の中世史の、一つの縮圖の如くにも感じられるのである。

椿の旅

男鹿の風景の殊に詠歎に値するのは、永い年代の目に見えぬ人の力が、痕も無くこの美しい風光の裡に融け込んで居ることである。其中でも椿と鹿との記憶せ

られざる歴史は、最も多く自分たちの興味を惹いて居る。

天然物保存に功勞ある生物學者等は、未だ植物の自然生北限といふことに就て我々の合點するだけの説明をしてくれなかつた。太古北半球が會て甚だ温かかつた時代に、此地方の全土を蔽うて居た椿原が、漸次退縮して今の小部分のみを残したといふことは、考へれば考へられるといふ迄の話で、如何にも心元ない假定である。若し其様な状態が實在したとすれば、何故に今でも氣候風土の自在なる繁茂を許す地方に、今少しく澤山の野生を見ずして、北地にばかり此通り豊富であつたのであらうか。

全體に椿といふ木の分布順序に付いては、まだ若干の學者の考へ残しがあるやうに思ふ。太平洋岸でも氣仙唐桑以北の數ヶ所、日本海の方でも津輕の深浦、それから青森灣内の小湊その他の岬の陰に、大よそ鳥が實を啄んで一息に飛ぶ距離

の、五倍か七倍かの間隔を以て、何れも一團の林をなして成長繁茂するのを、果して自然界の出鱈目と見ることが出来るであらうかごうか。

しかも他の一方には若狭の八百比丘尼の如く、玉椿の枝を手に持つて、諸國を巡歴したといふ旅人はあつたのである。愛する土地の美女と約束をして、又の年には椿の實を携へて再び訪ねて來たら、之を見て悦ぶべき戀人はもう死んで居たので、それを地に投じて歎き慕うて居ると、芽を吐き成長して神の樹となつたといふ類の言ひ傳へも、土地によつては残つて居るのである。それから又此木の茂る處は、大抵は神の杜である。無論椿存在の奇異が、神を祀つた原因であつたとも言ひ得るが、兎に角に人と此植物との關係は昨今で無く、又鳥などよりも親しみが深かつたのである。

植物には榎や楊の如く、庭木で無いまでも里の木であつて、山野に行けば却つ

て次第に少なくなるものが稀で無い。此等を存在せしめるだけでも人間の意思であつた。奥羽に向つては其上に積極的に、若干の努力が加はつて居るかと思ふ。人が考へて移し試みなかつたならば、椿などは到底雪國には入り得なかつたらう。この細長い日本といふ島は、常にチューブの如く又心太の箱の如く、或力があつて常に南方の文物を、北に向つて押出して居たのである。椿が稻や田芋と同じ程度に、人間生活との交渉の深いもので無かつたといふことは、天然信仰の一向に研究せられぬ此國に於ては、まだく断言し得る者は無い筈である。或は是も亦隠れたる一つの史蹟記念物であつて、單なる天然の記念物では無かつたかも知れぬのである。無暗に専門家の獨斷を信じないことにしよう。

鹿盛衰記

玉椿の常磐に縁にして、次々に若木の花を咲かせたのに比べると、變化曲折の最も甚だしかつたのは、此半島の鹿の歴史であつた。

爰では常陸鹿島や金華山の如き、信仰の保護は夙くから無かつたらしい。しかも自分が男鹿に遊んで、始めて知つて大に驚いたのは、今でもまだ鹿が居るといふ事實よりも、人間の干渉が餘りに自由自在で、彼等の運命が椿以上に、常に之に由つて左右せられて居たといふことである。

男鹿名勝誌の引用した舊記が正しいならば、男鹿山の鹿は既に安倍氏の治世に狩盡されて一旦は其種族が絶えた。それを佐竹侯入國の始の頃、わざ／＼仙臺領の多分金華山などから、三頭とか四頭とかを取り寄せて放したといふことである。

即ち今あるものも祖先以來の生え抜きではなかつたのである。

それが久しからずして再び田畠を荒らすやうになり、時に鹿狩を企て、其害を除いたといふことで、五六十年後の正徳二年の狩には、三千頭の鹿が捕獲せられた。それから四十年程を隔て、又九千三百、まだ其残りが二十年後に算へて見たら、二萬七千ほど居たといふのは、少々信じ難い統計であつた。

併し兎に角に鹿の居りさうな山である。居つても差支の無いやうな林の色をして居る。それが今日では「鹿捕へるべからず」の制札ばかり、村はづれの路傍に白と立つて居て、もう何人からも鹿の話などは聴くことが出来なかつた。

鐵砲流行の爲ばかりでも無いやうである。明治の文化は徹底して彼等の敵であつた。二三の遊覽地に於ては鹿を珍らしき見物とせんがために、あらゆる手段を講じてその明治化を防いだかの觀がある。現に東京四周の平原の、今筆者の居住

する黒土の高臺あたりも、ごく近い頃まで有名な鹿生息地の一つであつたが、誰が来て捕つたといふ人も無しに、今では甲州境の山にさへ居なくなつた。

食つたり皮を著たりするだけの事なら、昔の人の方が今よりも盛んにやつて居た。つまりは今日は人が公園地以外に在つて、鹿といふものに親しみを持たなくなつた爲に、鹿の方でも生存の興味、又は張合ひともいふべきものが、無くなつた結果ではあるまいかと思ふ。さう考へてもよい様な話は多いのである。

人が此五十年の間に二倍になつたとは言つても、まだく此邊の海と山との間には、静かな林や草原が多い。生計の事情の許す限に於て、野獸野鳥の繁殖を公認することが、恐らく男鹿の風景を活かす最初の用意ではあるまいか。自分等は所謂国立公園の計畫も、たゞ此條件の下に於てのみ、全國の支援を受け得べきものだと思つて居る。

雉の聲

斯ういふ心持から、自分が男鹿の風景の將來の爲に、最も嬉しい印象を以て聽いて還つたのは、到る處の雉の聲であつた。雉だけは今でもまだ此半島の中に、稍多過ぎるかと思ふ程も遊んで居る。それがもう他の地方の旅では、さう普通の現象では無いのである。

又例の餘計な漫談であるが、雉の聲で思ひ出す自分の旅の記念は、多くは無いが皆美しいものであつた。若狭の海岸は島が内陸と繋がつて、中間に潟湖を作つた點は男鹿とよく似て居る。たゞ其山が迫つて、水が小さく幾つかに區切られて居るだけである。この湖岸の林にはやはり雉が多く啼いて居た。六月始めの頃であつたが、小舟に乗つて三つ續いた湖水を縦に渡つて行くと、よく熟した枇杷の

實を満載して来る幾つかの舟とすれちがつた。紺のきものを著た娘などの乗つて居る舟もあつた。岸には高桑の畠が多かつた。此鳥の住んで居るやうな土地にはどこかにゆつたりとした寂しい春がある。

信州の高府(タカブ)街道といふのは、犀川から支流の土尻川の岸に沿うて越える山路だが、水分れの高原には青具といふ村があつて、五月の月末に桃山吹山櫻が盛りであつた。それから下つて行かうとすると、眞黒な火山灰の岡を開いて、菜種の畠が一面の花であり、そこを過ぎると忽ち淺緑の唐松の林で、其上に所謂日本アルプスの雪の峰が連なつて見える。雉が此間に啼いて居たのである。山の斜面は細かな花崗岩の砂になつて居て、音も立てずに車が其上を軋つて下ると、折々は路上に出て遊ぶ雉の、急いで林の中に入つて行く羽毛の鮮かなる後影を見たことであつた。

斯ういふ算へる程しか無い遭遇以外には、東京が却つて此鳥の聲を聴くに適して居た。春の末に代官町の兵營の前を竹橋へ通ると、右手の吹上の禁苑の中からいつでも雉の聲が聞えて居た。年々繁殖して今はよほどの數になつて居る様子である。駒込でも岩崎の持地がまだ住宅地に切賣されぬ前には、盛んに雉が遊んで居て啼いた。

男鹿の北浦などは、獵區設定の計算づくのもので、多分もう農夫の苦情もぼつぼつと出て居るであらうと思ふが、何とか方法を講じて此状態を保存させたいのは、春から夏の境の一番旅に適した季節に、斯うして雉の聲を聴きにでも行かうかといふ土地が、今では非常に少なくなつてしまつたからである。瀬戸内海の小さな島などでは、或は保存に適したものもあらうが、實はあの邊では人間が少し多過ぎて、おまけに精巧を極めた鐵砲を持ち、一日に七十打つたの百羽捕つたの

と、自慢をしたがる馬鹿な人が直ぐ遣つて来る。秋田縣の北のはづれの獵區の如きは、設定者の爲には少し氣の毒かも知れぬが、そんな金持はまだ當分は來ても少なさうである。

花と日の光

自分が男鹿に遊んだのは、五月第三の日曜日曜であつた。固より偶然の選定ではあつたけれども、獨り野の鳥の聲を聴くばかりで無く、海山の色を見るにも、是が恐らく最上の季節かと思はれた。今後の行樂者も此頃を中心にして、半島の旅を計畫せられんことを勧める。

山が霞んで遠景の隠れる點では、或は秋の中頃に劣るといふ人があらうが、其代りには峰の櫻がある。黒木に映する柔かな若葉の色がある。全體に此地の人々

は、まだ山の花を愛する慣習が無いと見えて、あれだけの樹林と村居とに比べては、見渡したところ天然の彩色が少し淋しいと思つた。今ある櫻なども曾て山詣での最も盛んな時代に、栽ゑて置いたらしい數株の老木のみである。

其山櫻の老木が、ちやうど私の訪ねた日には、眞青な空の下にちら／＼と散つて居た。眞山の五社殿を後に廻はると、僅かな間の草山の登りが特別に急であつて、又其對價以上に眺望が佳かつた。恐らくは將來男鹿を訪ふ者の、必ず來て見なければならぬ場處になるであらう。

山の斜面は略正東に向いて居る。最初は前に立つ寒風山に隔てられて、たゞ想像するだけの八郎瀉が、登るにつれて少しづゝ其兩肩の上に光つて來る。それが半腹を過ぎると殆ど全部、寒風の峰を覆ふやうに見えるのであるが、その見晴らしの最も優れた地點で路を曲げ、曲り角にはちやんと櫻があるのは、疑ふ所も無

く心有つての設けであつた。以前此邊まで一帯の林であつた頃には、必ず此花の陰に息を入れて、振返つて始めて三方の海を眺めたことゝ思ふ。

本山の若葉山の姿も、やはり此あたりから見るのが好いやうに思つた。細かに観察したならば、美しい理由ともいふべきものが解るであらう。山の傾斜と直立する常磐木との角度、之に對する展望者の位置などが、恰かも頭合ひになつて居るのでは無いか。畫をかく人たちに考へてもらひたいと思つた。

其上に昔も此通りであつたらうとも言はれぬが、明るい新樹の綠色にまじつた杉の樹の數と高さなどが、わざ／＼人が計畫したものゝやうに好く調和して居る。自分などの信仰では、山の自然に任せてさへ置けば、永く此状態は保ち得られると思つて居る。北海の水蒸気はいつでも春の常磐木を紺青にし、之を取圍む色々の雑木に、花無き淋しさを補はしめるやうな、複雑な光の濃淡を與へるのであら

う。さうすれば旅人は單に良き時におくれることなく、靜かに昔の山櫻の蔭に来て立つて、歎賞して居りさへすればよいのであつて、自然の畫卷は季節が之を擴げて見せてくれるやうになつて居るのだ。

風景の宗教的起原

この次には男鹿に遊ぶ順路といふものを考へて置きたい。自分は必ずしも海の男鹿を輕んずる心は持たぬが、折角高い廣々とした觀望場があるのに、それを外にして片端から横面を仰いで、直ぐに引返さうといふ遊覽法だけは排斥する。

日光山で瀧ばかり大騒ぎをしたのと同じ様に、あれは以前の修驗者の足跡を、法外に尊重した遺風であつたかも知れぬ。實際本山の方の名僧たちには、岩に攀ち洞に閉ち籠つて、浮世をよその修行をした人も多かつたから、舟で此あたりを

過ぐる者の、随喜し禮讚し且つは畏怖したのも自然だが、それと自然其もの、崇拜とは又別である。しかも風景の起原はごこの國でも、宗教が之を誘うて居る。殊には葛の根を煎じたものを、カツコンタウと謂へば有難がるやうな日本では、漢字で名の付いて居ることは俗衆への威壓であつた。つまり囚はれて居るのである。脱しなければならぬ。

人は自ら奇を好み珍を愛すと稱しつゝ、多勢が行くなら私も行きたいといふのは、笑ふに餘りある自家撞著である。そんな風だから山水が流行の奴となり、世間が騒いでくれぬと悲しくなるのである。卒直に言ふと、男鹿の外海ほどの巖ならば方々にある。伊豆の石廊でも土佐の立串でも、其他全然無名なる中國の海岸でも、まだあの上へ青々たる千年の佳松を載せて、今尙一首のへば歌をも拜領して居ないものが幾らもある。つまり日本はそんな國なのだ。大きいものを出来る

だけ小さく見て、外を知らずに獨りでそれを自慢しようといふ國なのだ。

新たに世に認められんとする風景はそんな物であつてはならぬ。海が荒れるから今日は引返さうといふやうな不自由極まる鑑賞方法に、この壯大な天然を放擲して置いてはいけない。出来るだけ色々の變化が見られる様にする必要がある。

故に男鹿を愛する人々の將來の案内書には、第一著に旅人の選擇し得るやうな幾つかの路順日取りを立て、略その道中の難易を説明すべきである。之に對する設備などは、人通りさへ多くなれば業者の方で改良してくれる。今までの名勝記は常に客引きを兼ねて居たから、外の人からは失望と不満を招くのみならず、仕事としても張合ひが無かつたのだが、斯んな愉快な事業は實は今の世の中にも少ないのである。地理の學問として青年が自ら企つべきである。

南北の結合

汽車の旅人ならば、何れは今後とても一日に見て還りたいといふ人が多からう。併しその中にも必ず難易二種の注文が出て来る。最も勞少なき一巡方法としてはやはり半分は船によつて、序に評判の高い海の男鹿を、見落すまいといふことにならうから、稍輕快なる乗合船さへ用意して置けば、永く船川の港のさびれてしまふ心配はあるまい。

船川門前間の道路は改修の計畫が既にある。こゝを自動車が行れば時間も早くなり、それだけ遊覽の變化も加はるわけである。戸賀の灣口は今のまゝでも、多分小舟の出入には差支へ無いのであらう。此からやゝ足の達者な連中が、僅かな崖路を登つて一二三ノ目瀉を見物し、廣々とした草原を自由に散歩して、陸から

別の乗合で歸つて行くとするれば、半分のお客様は取られる形になるが、それを循環の路線として置けば、逆に歸りの船にも乗る人があるわけだ。

併し大體からいふと、陸の方には大小の路筋が多く、従つて新らしい情景のまだ發見せられぬものが残つて居るから、北磯の交通が開けて行くと共に、一時は此方へ人の心が傾くであらう。其傾向を調和して、旅人も土地の人も共に満足するやうな、有效なる男鹿見物をさせる爲には、戸賀港の水陸聯絡が將來は一段と重要になることゝ思ふ。

半島の旅行に二日三日を費さうといふ者は、數は遙かに少ないであらうが、質に於て感謝すべき旅人である。然るに現在の所では彼等に對して、款待はをろか相談相手になるだけの設備もない。地圖さへも事によると、細工をして人の判断を誤らせようとするのだ。是では餘程の冒険家で無い限り、いつでも熟路に由つ

て有りふれた見聞を以て、辛抱をする他はあるまいと思ふ。

自分等の見たところでは、男鹿の美しさは水と日の光の變化に存する。即ち靜かに止まつて眺めて居るによい風景である。假に温泉などは小規模で、又快活で無いとしても、あの廣大なる高原は寶物である。ゴルフの連中などはきつと涎を流すだらうと思ふが、そんなことには自分たちは構はぬ。其よりも最近折角起りかけて、場處の無いので困つて居るのは、若い人たちの野營旅行だ。明るくて乾いて、居て見るものが多くて出入の自由な、斯ういふ好い練習地は東北にもあまり多くは無い。此に飲み水と質素な生活用品とを、供給する位は至つて容易なる準備であるのだが、それをすら今はまだ企てようとする人が無いのである。

旅人の種類

近世の紀行文學の一つのゴツは、如何に世に知られた路傍の好風景でも、之をさも新發見の如くに吹聴して、國中の最も無識なる者、若くは多少の反感を抱く者に對するやうな態度を以て、記述と解説の丁寧を極めることに在るらしい。即ち所謂名辯護士が法廷に立つ如く、常に背後の傍聽人の感激を目的として居ればよかつたやうである。ところが不幸にして私のヲガサベリは、相手が自分よりも遙かに詳しい秋田人であつた。さうして男鹿の天然の大いに惠まれて居ることは内田伯爵すらもよく知つて居たのである。

そこで在來の型を破つて、斯んな無益なる豫言の如きものをしなければならぬことになつた。風景は固より品評批判すべきもので無いと思ふが、之に親しまん

とする人の心持だけは、まだ幾らでも改良し得られる。山水は永古に無心であらうとも、たゞ其の正しい鑑賞と理解のみが、我々旅人をして修養せしめるからである。

男鹿は久しい昔から、もう住民のみの男鹿では無かつた。其上に近頃はたしか縣の有力者が先に立つて、顯勝會とでもいふやうなものを設けて居る。會を作つたからには何か仕事が無くてはなるまいと思ふが、まだ其事業が氣を付けて見ると、案外に澤山未發見のまゝで残つて居る。

自分の差出口を今一度繰返すならば、土地の生業に障害を及ぼさぬ程度に、今少し樹を茂らせ花を咲かせ、鳥獸を遊ばしめなければならぬ。殊に遠い對岸の大陸から、年々季節を定めて遊びに来る渡り鳥の大群を、せめて觀光團程度には優遇しなければならぬ。打棄てゝさへ置けばそれが自然の保存になるやうだが、現

在の人類繁榮は實に暗々裡に彼等の安寧を侵蝕して居るのである。だから心を付けて、少なくとも燃料の爲に樹林が衰へぬだけに、一方には復原區域を設定して置かなければならぬ。

交通機關の改善も結構だが、別に只あるいて遊ぶ人々の便宜も考へてやる必要がある。然るに此だけ多い小徑と其聯絡とを、示すだけの地圖すら無い。案内記と名の付くものは偶々あつても、それは單なる飲食店の廣告に過ぎぬ。前に來て見た旅人の經驗と興味とが、精確また平均には説明せられて居ない。季節のことも書いてなければ、順路も路々の記念物も閑却せられ、徒らに最上級の讚辭を列ねて、濱に轉がつた岩ばかりを説いて居る。一日も早くそんな物の代りを作つて、頻りに知りたがつて居る人々に語らうとしなければならぬ。

其よりも尙大切な急務は、將來如何なる種類の訪問者を、主として期待する



ながさべり

三〇〇

がよいかを考へて置くことである。感覺の稀薄ななまけ者ばかりを、何千萬人を
びき寄せて見たところが、男鹿の風景は到底日本一にはなれまい。

(昭和二年六月、東京朝日新聞秋田版)

東北文學の研究

一、義經記成長の時代

發端

あらゆる我々の苑の花が、土に根ざして咲き榮えるやうに、一國の文學にも正しく數千年の成長はあつたのだが、文字といふものから文學を引離して見ることの出來ぬ者には、その進化の路を考へることが自由で無かつた。殊に見もせぬ西洋のきれぐれの作品を、人が辛苦して歎賞せんとする如く、都市の塵煙の中から出現したものでなければ、文學として愛し且つ憐がれるに足らぬと考へてでも居

るらしい地方の諸君には、今は殆ど目隠しと同様なる拘束があるのである。早くさういふ薄暗い時代が過去つてしまへばよいと思ふ。

文學と文字と、この二つのものゝ混同は昔からであつた。若し迷信ならば歴史ある迷信である。大抵の國には文字といふ語から絶縁した文學といふ語は無いのである。文學は即ち文字を以て書かれたものといふことで、文字あつて始めて文學ありといふ考から、最初は其以外のものを文學の中には入れなかつたのである。しかも其斷定の條理が無かつたことは、日本人ならばすぐに判る。例へば萬葉にはその輯録の時から、數百年前の歌までも載せてある。古事記書紀には神代以來の、尊い物語の色々が傳はつて居る。それ等が我邦に發生した全部で無いとする以上は、文字以前の文學といふものがあると同時に、文字以外の文學といふものも、亦少なくとも上代には盛んであつて、文字の教育の普及と共に、段々と其區

域を縮小して來たことも、推測に難くないのである。さうしてこの内外の二種の間には、各時代を通じて不斷の脈絡系統こそはあつたが、雅俗貴賤といふが如き類の差別は、本來は少しも有り得なかつたのである。

勿論文字に由つて先づ征服せられたのは、朝廷又は寺院周圍の文學であつた。少しでも價值ある口と耳との文學ならば、筆を役して之を保存しようとする者が幾らも其邊に居たからである。之に反して夙く村に生れ、若くは旅をして田舎に入つて來たものだけは、たゞ古來の方法に遵つて傳承するの他はなかつた。特に文字に録して置く力も無く、又少しも其必要が無かつたのである。それが何れの方面に殊に年久しく行はれたか。文字の新威力に拮抗して、如何に忠實に其本分を盡し、寧ろ往々にして彼に在つては不可能なりしものを、如何にたやすく爲し遂げて居たかを考へる爲に、試みに自分は義經記と稱する一篇の物語を、例に取

つて見ようとするのである。是が必ずしも美しい東北文藝の全部を、代表して居たと認めるからでは無い。曾ては道の奥の野に咲いた藝術が、黄金よりも尙弘く國中を周遊して、終には都市の文字の文學に、永く其跡を留めて居るといふことを、今は却つて忘れてしまつた人が多いが、幸ひにしてまだ此方面には、辿つて尋ねて行かれる一筋の路が残つて居る。延びて繁るものは必ず根あり、流れて潤ほすものには必ず清き源泉があるといふ事實を實驗することに由つて、出来るならば標準文學の狭苦しい統一から、脱却して見たいと思ふからである。

義經記の成立

我々の祖先の中世の生活に、義經記ほど親しみの深かつた文學は他に無からうと思ふが、それと同時に後々是ほど粗末に扱はれたものも亦少ないやうである。

それには江戸といふ土地が此物語と、あまりに縁が無さ過ぎたといふことを考へて見なければならぬ。富士を見ると曾我兄弟を思ひ出すが、あの麓を流れた黄瀬川の岸で、生れて始めての對面をした兄弟は、後に不愉快な仲たがひをして居る爲に、古蹟の感興を割引してしまつたのである。鎌倉へは靜御前が來たばかりで、判官は首になつても、腰越から中に入ることを許されなかつた。さうして武藏には兄將軍の足跡ばかり多い。つまりは此物語が、關東の土には合はなかつたのである。趣味の相異が親と子兄と弟を疎隔することは、昔といへども免れ得なかつたのである。

近代は多くの活字版が、再び義經記を我々の間に流布したけれども、其親本といふべきものは一つである。現在の定本が版になつた最初は、はつきりとは知れぬが江戸期の初らしく、三百年より古いことは無いやうである。さうして其時に

始めて著述したもので無いことだけは誰も認めるが、以前寫本で行はれて居た期間が、百年か百五十年かはた尙すつと久しいかは、之をまだ決することが出来ぬのである。況んや其内容が如何に變化して來たかの問題の如きは、實は考へて見ようとした人も少ないのであつた。

平家物語などとの一番大きな相違は、義經記には異本といふものが至つて少ない。平家の方は幾つとも無い別系統の寫本が見付かつたことは、山田教授も既に報告せられた通りで、源平盛衰記などもあまりに改惡が多いけれども、實は新しい極端な異本である。平家を盛衰記の程度にまで、變化させて行くことも元は出來たのである。然るに義經記ばかりは一向に其跡が認められぬが、單に此事實のみを以て或は寫本流傳の時代の甚だ短かつたことを、想像する者があるなら速断である。何となれば人が口から耳へ語り次いで、寫本なんかは入用で無かつ

た場合が、存外に永く續いたかも知れぬからである。

實際又平家なども同じことだが、物語の流布に携はつた者は、もとは主として座頭であつた。座頭には目が無いから本などの入用は絶対に無かつた。然るに平家物語にはあれだけの異本がある。不思議だと言つてよいのだが、流派の分立があまりに甚だしく、且つ學問階級がそれぞれ之を後援した爲に、盲も是非自分の本を持たねばならなかつたのである。之を書くことに助力した人は、又讀む方にも參與し、琵琶抜きに所謂素讀みをしたい希望が早く現れた。我々の讀むといふことは語る方の真似であつた。音讀をしない場合は見ると謂つて讀むとは言はなかつた。斯うして段々に最初の目的以外の、寫本といふものが生じたのである。此等の幾つかの事情が伴はなかつたら、平家にも異本は無かつた筈である。自分が最近に實驗したのは、信州には諏訪大明神御本地と稱して、地方限りの語

り物がある。甲賀三郎大蛇の形に化して地下の諸國を巡り、後に地上に戻つて來て諏訪の大明神と爲るといふ飛んでも無い話である。近々に章句を版にして置きたいと思つて居る。諸處を尋ねて十種に近い寫本を見たが、何れも百年そこくより古いものは無かつた。しかも意外なことには南北朝の末、延文年間に書いたことの確かな、安居院の神道集といふをかした漢文に、同じ筋の話がちやんと出て居るので、つまり農民の隱居などにも假名文字が書けるやうになるまで、三百年近くも本無しで元の形を保存することが、昔の人には出來たのであつた。それが又古事記が精彩ある神代の記録を、世に留めた理由でもあるので、現にアイヌの中の稗田阿禮などは、今だつて文字を利用しようといふ念は無いのである。

昔の文字の教育は殆ど京ばかりで、僧でも田舎に居る者は諳誦が仕事であつた。遙々九州から豆を脊負うて學問をしに來たといふ話もあり、地方にはその機會は

至つて少なかつた。聽衆は物語の愛好者であつたけれども、やはり上下を通じて皆一種の盲であつて、寫本の必要の無かつた點は、語る座頭も同様であつた。従つて今日異本の少ないといふことは、義經記の京へ入ることの遅かつた證據にはなるかも知れぬ。又之に携はつた者が偏土をあるいて居たことを意味するかも知れぬ。併しそればかりで此物語の起原の古くないことを推定するのは、例へば安居院の神道集が我々の目に觸れなかつた場合に、かの甲賀三郎の話を天明寛政より後に始まつたと解するやうな無理である。殊に其内容が果して古い儘であるかはた又京都へ來てから此様に變化したもののか。其變化も唯一つしかなかつたか否かに至つては、別に他の方面の資料を借り來つて、落付いて考へて見なければ何とも言へぬのである。

座頭の交通と割據

義經記の今ある本は、始から讀み本であつた。盲で無くとも一人の語り手が、之を管轄するには餘りに込入つて居る。しかも其各部分に就いて見ると、例へば石山寺の紫式部のやうに、或才人が紙を伸べ筆を捻つて書き出したものとは、如何にしても考へられない。然らば是も亦一種の結集であつて、誰かゞ物好きに又は辛苦をして、之を中央へは持ち寄つて來たのである。京都大番の組織が改まつて、追々に上つて來る國々の武人團が、假屋を構へて共に住むことゝなつてから地方風俗の都の生活を動かしたものは、獨り二三の歌や語り物のみでなかつたが殊に徒然なる旅宿の伴侶として、遠い國元から取寄せる品としては、是ほど手軽なもの先づ他には無かつたので、所謂座頭の京登りの如きも、本人には又別途

の目的があつたにしても、少なくともこれが最初の手引きにはなつたのである。

地方には盲人の數が、今よりは遙かに多く、その生存の便宜の得にくかつたことも、亦後世の比では無かつたらしい。さうして金をためて所謂京登りをするといふ習慣も、亦決して江戸時代以後に始まつたことでなかつた。備後の神石郡の古風の田植唄には、

おん坊京に上るなアラ

びや箱なんぞは置いて行け

あごでつるりやつんつるりや

弾いてなり慰まう

といふ文句なども残つて居て、按摩針の御用も無く、三味線も筑紫箏もまだ知らなかつた時代から、ぐわらんぐと鳴る琵琶の箱を脊負うて、山阪を越えて遙々

の都まで、便宜があればこそ出て來たのであつた。奥州出羽の處々の時には、狼や大蛇のやうな怖しい山の神に、琵琶の一曲を所望されたといふ座頭の昔話か、幾つも残つて居るのであつた。しかもさうして出世したのは何人か一人で、他の多くの田舎に止まつた者も、何で活計を立てたかといへば、やはり亦琵琶と物語とより他には無かつたのである。

越後地方までは近世になると、上方を真似て平家を語る座頭が居たが、全體として關東以北の地には、此物語の流行し得ない事情はあつた。しかも人間の盲が昔ほど多かつたと同時に、源平兩氏が合戦を始めるより遙か前から、琵琶法師といふ者のあつたことは、澤山の證據がある。光源氏が須磨に流寓して居た時に、明石の入道が其無聊を慰めんとして、琵琶法師の真似をしたのは、物語だから信じられぬなら、後鳥羽院の熊野御幸の御旅宿へは、泉州でも紀州でも、此者が召

されて一曲を奏して居る。それは所謂盛者必滅の理を説くには、少しまだ早過ぎた時代の事であつた。座頭だからとて平家を語るのが本筋ときまつたわけでも無い。たゞ彼等の間には流派の軋轢があつて、夙く中央の形勝を占めた者が、官府の力を挾んで號令しようとしたばかりであつた。近世の所謂當道を否認した盲人群の中には、生れた村々に黙つて引込んで居た者と、起つて大に之と抗争した者があつた。寶曆前後の西國の大訴訟は、替幻書と題する記録が残つて居る。長門と筑前の盲人の頭目には、二三の刑戮に觸れた者さへあつたが、土地舊來の慣習はごこ迄も彼等を援護したのみならず、尙背後には天台本山の、尻押といふものが實はあつた。全體に此方面には、醜恠なる蔭の事情が中々多かつたやうに思ふ。比叡山の如きは最後まで利權恢復の望を絶たず、現に維新の際にも人を東國に派して、新たな盲人組織を試みた形跡があるが、差當りの入用には其點まで説

くには及ばぬと思ふから省略する。

九州などの盲僧と稱する者は、もと悉く一寺の住職であつて、しかも琵琶弾きは其主業であつた。彼等が旅行の習慣を利用して、之を細作密偵に使役したもので、暴露して敵に殺されなかつた者は歸つてから優遇せられ、島津氏などでは鹿兒島と日向の某地に、随分いかめしい盲僧派の本寺があつた。しかも配下の多數は寺祿のみでは養はれず、竈拂ひと稱して夏冬の土用に、人家を巡回して地の神の祈禱をした他に、言はず餘興として色々の物語を弾き、武家の子弟などには物好きに就いて學ぶ者もあつた。それが今日の薩摩琵琶の起原である。筑前の方では明治になるまで、琵琶の盲僧は宗教行爲の外に出でなかつたのが、橘某なる者が薩摩に倣うて、思ひ切つて俗曲を行ふことにしたのである。其他まだ詳しくは聴かぬが、肥前にも同種の寺があり、代々盲目を以て相續する爲に、不自然

な所業もあつたと傳へて居る。肥後ではケンギウ(檢校)と謂ふのがこの盲僧のことであつた。八代郡の松求麻邊にも小さな中心があつて、是も地神經を讀んであるく外に、興がる早物語や作り物語の類を、招かれては語つてあるいたので、その文學の殆ど全部が、最近になる迄口から耳への傳承に限られ、従つて境から外へは出なかつたのは、言はず中央の座頭檢校が、目のかたきにして之を近寄せなかつた爲である。

つまり平家物語だけは記録の文學として、既に優越の地位を付與されて居るが本來はやはり一時代一地方の産物で、單に歴史の偶然から後非常の流行を見たといふ迄である。即ち其舞臺といふのが京都から關門まで、瀬戸内海を取繞らした最富裕の地方であり、同時に中古以來の文字教育の進路と、それが略一致して居た御蔭に、喧嘩もした代りには元の形がよく保存もせられたので、如何に古かつ

たところが奥州などの文學が、本ばかりからは之を味ふことの出来なかつた理由も、亦此裏面から推測することが出来るのである。

讀み本としての義經記

單に今日の流布本ばかりで判断すれば、義經記が平家物語の弟分であり、或は弟子であることに議論は無い。例へば義經の一生涯で、最も華やかなる一谷屋島壇浦は、僅かに二三行を以て片付けてある。佐藤忠信は非常な働きをして居るに反して、兄の嗣信のことは一言も説かずに、後日奥州の親の家へ行くと、盛んに二人の兄弟を語つて居るのは、要するに普通の平家に其部分を譲つて、もう改めて繰返すことをしなかつた結果である。しかも此が最初の義經の物語の、うぶの形であつたといふことは疑しい。と言ふよりも此方は非常な寄せ集めの繼ぎはぎ

で、従つて不必要に引延ばしてある。一言でいふならばまづ感心せぬ本である。

それを今少し細かく分解して見ると、八卷の義經記は三卷以上が生ひ立から出世まで、四卷以下が没落譚になつて、其中間の世盛りといふものが些しでも説いてない上に、其前後とても一續きの平らな叙述ではないのである。言はゞ幾つかの物語のかたまりを、並べて見たといふ迄である。従つて前に私が物語の舞臺と名づけたもの、即ち語り手と聞き手とが共に知つて居らねばならぬ場處が、凡そ六つほどに分れて居て、それ／＼少しづつ異なつた彩色を以て、部分的に非常に詳しく描かれて居る。其中でも京と奥州とがあと先に二度づつ、義經活躍の舞臺となつたのは當然である。鎌倉鶴ヶ岡も靜御前が出て舞ふ爲に、必要であつた事情は察せられるが、獨り意外なのは吉野山の記事である。僅か十日の間の雪の中の漂泊、さまで華々しからぬ峯の衆徒との交渉の爲に、特に丁寧なる脚色を費し

たことである。察する所謠曲や幸若の舞に見る如く、義經の物語にも別々の幾篇かがあつたのを、略年月の順序に繋いで見たといふばかりで、つまりは相應な長さの読み本とする爲の、新らしい細工であつたらしいのである。

従つてよく見ると色々の喰ひ違ひがある。例へば鬼一法眼から兵法の秘書を取出したと説かんが爲に、義經は途中で一度、中仙道を通つて奥州から京へ還つて來なければならなかつた。辨慶が家來になるのも其際の話になつて居る。それから伊勢三郎が見出される爲には、保護者の金賣吉次と一旦は手を別つて、上州松井田の邊まで餘計なまはり路をしなければならなかつた。一度に趣向を立てたものならば、斯んな不自然なことにはしなかつた筈である。ところが何か理由があつて、伊勢三郎は妙義山麓に隠れ住み、それが最初の家來として召し抱へられたことにしなければならなかつた。平家や盛衰記を見て心付くことは、義經の家來

としては辨慶よりも、伊勢三郎の方が遙かに多く働いて居ることである。辨慶が家老格に引上げられ、勸進帳の主人公と迄もなつたのは、全く義經記以後の變化であつた。

斯ういふ粗末な組合せのセメントは、多分京都製だらうと思はれる。或は多くの文學書に例のある如く、最初の筆録者の手細工であつたかも知れぬ。一人の座頭が一回に語るのは、精々三段か四段かであつた。それが大にはづんで毎晩のやうに喚ばれて居るうちに、追々に新らしい場面を附加して行つた形跡は、平家なごにもよく表れて居る。太平記の如きも始と終と、文體も違へば取扱方も變つて、一遍に出來たもので無いことは誰でも認める。それを書物にする際に量を貪り、をかした統一の無いものにした例は、盛衰記ばかりでは無い。即ち語り始めた時の動機が色々だから、物語の中心が色々に移つたので、義經記などでも義經を主

人公にしたのは却つて前半分の方に限られ、吉野山では佐藤忠信、鎌倉では靜御前、北國落では武藏坊、高館では鈴木兄弟、十郎權頭兼房といふやうに、シテの役は一貫しては居なかつた。

之を要するに現在の義經記は、合資會社の如き持寄世帯で、各部分の作者産地はそれ／＼に別であつた。京都は兎に角、吉野山中の寺生活などが、到底奥州に居ては語れなかつたと同じく、奥州及び之に通ふ道筋の物語は、京都居住者の想像し得る境ではなかつた。即ち此方面に住んで語りを職とする者の、參與して居たことを推定する根據である。此と同時に吉野山中の出來事が法外に詳しいのも必ずそれだけの理由があつたことで、將來の研究には有用な資料かと思ふが、残念ながらまだ確かな手掛りはない。仍て差當つては此等の關係を引離して、特に奥州の部分が奥州に産した事情を、今少しく考へて見ようと思ふのである。

奥淨瑠璃の元の形

私が奥州系かと考へる義經記の特色は、殊に第七卷の北國下り以下によく現れて居る。其第一は地理の精確といふことである。文治二年の二月二日、義經は主従十六人、山伏の姿に身をやつして、先づ近江の湖を海津へ渡り、荒乳山を越えて越前に入り、それから諸處の關と船渡して苦勞をしつゝ、越後の直江の津に著くまで、地名の順序などにをかしいと思ふ所は見出し得なかつた。直江は北陸道の中途である故に、それ迄は羽黒山伏の熊野に參つて下向すると謂ひ、それから先は熊野山伏の羽黒に參る者と偽れば、言葉訛りで疑はれることはあるまいと謂つて居る。それから此地で一悶著あつて後に、船を備うて乗出したところが、海上が荒れたので遠く走ることならず、僅かに寺泊に來て上陸したと謂つて、それ

から又順次に沿道の地名を擧げて居る。一二の今の地圖から見出し得ぬものはあるが、大體に海邊傳ひに、鼠ヶ關から出羽に入り、三瀬を越えて庄内の大寶寺には入つて居る。單に精細を粧ふ爲ならば、この様に迄するには及ばなかつた。それから最上川を傳うて清川からあひ川の津、大體に今の陸羽南線と同じ路を玉造に越えて、平泉へは向つたことになつて居る。斯うした永々しい驛路の情景を語つて興味を催し得たのは、勿論其路筋を利用した人々でなければならぬ。又聽く人がよく知つて居る故に、滅多な事も言へなかつたのである。それが同じ題目を語つた舞の本などを見ると、早くも受賣の大間違ひをして、姉羽の松龜割阪などと、麗々と二度まで路順を顛倒して居る。實際羽黒の山伏が開いたかごうかは知らず、少なくとも此が足利時代以後の、奥州人の京街道であつた。冬分などは東海道を通つたかとも思ふが、日本海側の方が遙かに距離も近く、其上に便船次第

海路を利用することも容易であつた。それを十分に實驗した者が作者であつたとするれば、京に住んでかりそめに此方面に旅をしたといふだけの、因縁では無かつた筈である。

第二の特色は山伏の作法の詳しいことである。辨慶は熊野に生れたといふのみで、もと法師であつて修験道には携はらなかつたのに、曾て西塔に住んであらまし人の話を聞いたと稱して、其實は非常な通であつた。義經は越前の國府から、用でも無いのにわざわざ平泉寺に參詣し、衆徒と應對して危く馬脚を露はさうとして居るが、そんな場合にも辨慶の氣轉に由つて、言ひ遁れたことになつて居る。京の君を羽黒山のちごだご偽ると、花の枝を折つて贈らうとする者があり、又は横笛の一曲を所望する者がある。それをも仲に立つて然るべく辨慶が取なしたことになつて居る。其他庄内では田川太郎實房の子の瘡病を祈禱して見たり、又直

江の津の笈さがしの場合でも、聊か事を好むに近い點まで、山伏の眞似を試みて著々と皆成功して居る。山伏若くは之に接近して居た者でなかつたら、到底此だけの物語を語ることは六つかしく、又筋を運ぶ爲にはそれ迄の必要は無いのであつた。つまりは奥州邊土の生活に修験道の交渉が多く、誰しも若干の興味を之に寄せて居た時代相を、暗示するものと解してよいのである。所謂出羽三山の歴史は今や甚しく埋没した。熊野と羽黒との交通は、尋ねて見ることも困難である。しかも熊野が此方面に向つて、曾て盛んに傳道した痕跡は遺つて居るので、古くは名取の姥の夢の歌の話、之に次では各地の熊野神社と、是に因縁ある澤山の鈴木氏は、今尙其名残を留めて居る。熊野の神人はもと三家、所謂宇井榎本鈴木の中で、宇井は早く衰へ榎本はもう神と別れたが、鈴木の一姓のみは結合の力強く三河其他の二三の地方に於ても著しい繁榮をした。殊に東北に於ては、久しく其

傳統を保持して居た。それが義經記の成長には、隠れた關係を持つて居たらしいのである。

だから第三の特色として、龜井兄弟の武勇が、極度に花やかに描かれてあるのである。龜井六郎の義經に隨從したことは、平家物語には見えて居らぬ。高館落城の時に年僅かに二十三、即ちつと晩年の奉公人であつた。彼の兄なる鈴木三郎は、衣川合戦の前日に尋ねて來たことになつて居る。今更武運の傾いた大將に仕へるにも及ぶまいといふ忠言を斥けて、義の爲に一命を棄てた。けなげな討死の標本ともいふべきものであつた。鎌倉殿より給はつた甲州の所領を擲つて、單身で下つて來たと謂つて居るが、尙故郷なる紀州の藤代に、幼弱の一子を殘して來たとあるのは、我々の注意を要する點である。藤代は和歌山の方に近く、有名な熊野王子の一つであつたといふのみで、熊野信仰の中心からは大分離れた土地

であつた。それが特に龜井兄弟の本居となつて居るのは、或は特別の事情があるのでは無いか。兎に角に今では如何なる種類の人々の中から、此物語の出たかといふことは断定しにくくはなつたが、少なくとも平泉地方に住んで居た鈴木一族の社會上の地位が高くなると共に、斯ういふ自分たちの家の譽れとなる物語が、單なる前代のローマンスといふ以上に、聽いて面白く又嬉しいものになつたことは察せられる。

それから尙熊野の爲に氣を吐いたといふ點では、武藏坊辨慶も亦決して人後に落ちなかつた。義經記の説に従へば、辨慶の父は熊野別當辨セウ、母は二位大納言師長の女であつて、共に有りさうでしかも無い人であつた。胎内に在ること十八ヶ月、奥齒まではえ揃うて生れたと稱し、即ち如法の鬼子でもあつた。而うしてその殆ど半神的なる猛勇に至つては、既に三尺の童子と雖之を畏敬せざる者は

無いのであるが、或は又辨慶三兄弟なども謂つて、鈴木龜井の同胞なるが如く考へて居る者もあつたやうである。兎に角に今日の語を假りて言ふならば、義經記後篇は正しく熊野及び熊野人の爲の宣傳であつた。

家と物語と

佐藤庄司祖孫三代の忠節といふことも、やはり單なる武士道の典型といふ以上に、之を聽いて感動する人が多かつたことが想像される。秀衡將軍の家も系圖では佐藤であるが、信夫の嗣信忠信兄弟が有名であつた爲に、後には彼等の末裔なることを信じない佐藤家が少なくなつた。此一族に取つては義經記の一書は、今尙うれしい祖先の記念であつて、歴世之に由つて自ら勵み、家の名を重んぜしめた効果は絶大であつた。今更傳統の史實に合致すると否とを問ふ必要は無いので

ある。況んや質朴なる昔の人々には、古く語られる物は皆之を信することを得たので、しかもそれが作り事でもよいから、是非聽いて置きたいといふ類の話のみであつた。物語の古い家々に歓迎せられた所以である。只残念なことには衣川に籠城したといふのは、僅かに十何人かの他所から來たといふ武士ばかりで、寄手數萬人の軍勢には土地の名族も居たであらうが、其武名は説き立てられる機會が乏しかつた。従つてたま／＼現れて追はれ殺される固有名詞も、力めてよい加減の、不名譽を感ずる者がそこいらには無いやうな苗字ばかりであつた。それも半面から聽者の何人であつたかを想像させる資料である。

要するに義經記の主要な部分が(當時さう呼んで居たか否かは別として)、京都に持つて出て恥かしくない程度に迄、既に奥州の地に於て成熟して居たのは、獨り語り手の技藝と熱心との力のみで無く、久しい間ちやうど頃合の聽衆が地元

あつて、何度も／＼所望して語らせて居るうちに、追々に話が斯うなつたのである。それには勿論多くの天才の空想と、多くの伶俐なるボサマたちの暗記とを必要としたのだが、更に其背景には住民の家を愛し又祖先を思慕するの情と、熊野の信仰とが潜んで居たのである。歴史の記録中に何の證據も無いばかりか、寧ろ彼とは矛盾するやうな言ひ傳へが、うそでも無ければ又作り話でも無く、時としては之に基いて、正史を増補し新訂せんとする迄の、實力を具へて來たといふのは、別に又それだけの理由があつたわけである。

ところが其理由といふものが、多くの傳承文學に在つては之を發見することが容易で無かつた。従つて我々は屢々故人の妄誕の癖を邪推して見たり、又は文藝に固有の目的計畫あること、例へばソロン・リクルゴスの法典の如くであつたものと考へて居たが、幸ひにして今ある義經記の章句の中には、偶然にまた色々の元

の面影が残つて居る。之に由つて獨り其起原の東北の田舎であつたことを知るのみならず、世を経て物語の追々に發芽し且つ成長して來た自然さを、幾分なりとも感じ學ぶ手がかりが有るのである。作者が是非とも一段とえらい人、秀でた才能を持つ人なることを要せず、新年の勅題に向つて何萬の獻詠ある如く、歌人俳人短篇小説家といふ者が、殆ど地方の青年の數だけでもあつて、彼等は單に有名と無名との差別だけを、眞劍になつて争つて居るといふ現在の日本風も、此で始めて少しばかり説明が付くのである。

二、清悦物語まで

生き残つた常陸坊

義經記成長の事情を窺ひ知る端緒として、最初に我々の心付く特色の一つは、いよ／＼泰衡が背き和泉夫婦が忠死を遂げて、主従僅かに十三人で、寄手の三萬餘騎と激戦するほどの大切な日に、生憎其朝から近きあたりの山寺を拜みに出て籠城の間に合はず、其儘還つて來なかつた者が十一人あつたといふ點である。其十一人の大部分は名が傳はらぬが、たゞ一人だけ知れて居るのは常陸坊海尊であつた。それが其通りの歴史であつたとすれば是非も無いが、人の口から段々に大

きくなつた物語としては、斯様な挿話は見た所別に必要も無いので、若し必ずさう語るべきであつたとすれば、別に隠れた理由が何か有つた筈である。

ところが一方には足利時代の下半期、即ち義經記の京都邊まで盛んに行はれて居た時代に、此とは獨立して別に右の常陸坊海尊が、まだ生きて居るといふ風説が諸國にあつた。殊に東北では近い頃まで、海尊仙人を固く信ずる者があつて、今日でもそれは其筈だと謂ふ人が無いともいはれぬが、實は此噂が一箇處一口では無い爲に、却つて始末が悪いのであつた。例へば本朝故事因縁集には、海尊富士に入つて岩の上に飴の如き物あるを見付け、之を食つてから不死になつた。近代は信濃の山奥で、其姿を見た者があつたとあつて、その近代とは江戸の初である。今から百五十年前にも、能登と加賀越後に又別口の話があつた。それよりも更に有名なのは會津城下の實相寺、第二十三世の桃林契悟禪師、其號を殘夢又

は秋風道人と云ふ者は即ち海尊だといふことが、既に林羅山の神社考などにも見えて居る。しかも此人なりとすれば、非常な長命であつたが天正四年の三月に、目出たく大往生を遂げて居るので、それではえらく都合の悪いことには、仙臺以北の海尊仙人の如きは、其後又五十年もしてから漸く出現して居るのである。つまりは互ひに相手を贖物としなければ、成立たぬ話ばかりであつた。

尤もこの殘夢和尚などは、必ずしも自らさう名乗つたのでは無かつた。たと第一には年齢を言はぬ。第二には源平合戦の顛末を、あまりに詳しく知つて居る。第三には人が貴僧は常陸坊であらうと言ふ時に、微々として笑ふのみでさうで無いとは決して答へなかつた。即ち何か世間の方にもさう評判するだけの根據があつたのだが、單にそれだけの事で濟むならば我々にも出来る。一般には足利時代は、現世福德の盛んに欲求せられた時代で、鞍馬西ノ宮等の福神化と共に、長命

談も亦多く行はれた。私が次に説かうと思ふ若狭の八百比丘尼も其一つなれば、又車僧七百歳といふのも有名であつた。さうして彼等は皆單に一人で靜かに仙人になつて居たのみで無く、稍之を世人に見せびらかす形があつたのである。

會津實相寺の殘夢和尚の處へは、石城の方から無無といふ老人が折々來た。逢ふといつても源平合戦の話ばかりして居たといふ。曾我の敵討の朝別れたまゝだつたなどと、話して居たとさへ傳へられる。

無し無しといふはいつはり來て見れば有ればこそあれ元の姿で

無し無しといふもことはり我姿あるこそ無きのはじめ也けり

斯んなをかした禪問答の歌までが、よくは解らぬ爲に疑の種に算へられたらしい。又福仙といふ鏡磨きが時々此御寺の近くに來た。それを見て和尚がある時、あいつは義經公の旗持ちであつたと謂つた。それを聞いて福仙も負けぬ氣になり

和尚様こそ常陸坊海尊なのだと言つたとかで、すつかり土地の人が信じてしまふことになつたのである。近くは又天明年中にも、上州伊香保の木樵で下駄灸といふまじなひをして居た親爺が、やはり義經の旗指しであつて、海尊から此名灸の傳授を受けた爲に、長命して居るやうに評判された。いづれも本人は大抵白状せず、世間が段々にさうしてしまふのには、何か曰くのあつたことらしいのである。つまりは夙くから常陸坊は高館で死なず、さうしてまだ生きて居るといふ風説が無かつたら、到底次々に斯んな出來事も起らず、一方には又いつ迄も此種の出來事が續く爲に、どうでも此人を生かして置かぬと、昔話が成立たぬから困るといふ様な事情が、古い昔からつい近年まで、ごこかの隅に隠れてあつたのでは無いかと思はれるのである。

清悦出現のこと

私が殊に話をして見たいと思ふ清悦物語なども、疑も無く斯うした社會相の間から、頗る自然に發生したものゝやうである。清悦の物語は南部叢書の一冊として遠からず出版するさうだが、今日はまだ寫本時代で、是は又不思議なほど異本が多い。見た人は多からうが印象は一樣で無いわけである。其異同をざつと考へて見るならば、幾分か奥淨瑠璃の衣川合戦談、即ち所謂奥州本の義經記、及びそれから發達したかと思ふ義經記流布本、乃至は能や幸若の種々の物語との、互ひの關係が窺れるだらうと思ふ。

現在ある清悦物語の寫本は、殆ど持主毎にといふ程の相違はあるが、要するに至極簡單なもので、義經の家來の或一人の、生き残つて長命したといふ者の直話

である。元和二年といへば高館落城の時から四百三十年近くも後のことだが、小野太左衛門といふ柴田郡の武士が、平泉附近の山に遊んで、不思議な老人に行逢つた。源平合戦の事を詳しく知ること、丸で見て居た人のやうであつた。色々尋ねて見ると、それが果して義經舊臣の一人であつた。落城の際には常陸坊海尊と只二人、随分よく働いたが誰も殺してくれないので、とう／＼生き残つたと稱して居た。話が始から義經記とは少しちがふのである。

さうして其後の四百何年間、生きて居た理由も亦別であつた。前年秋の一日、二人の同僚と共に衣川の上流に出て釣をして居ると、かはつた山伏が出て来て寄つて夕飯を食へとすゝめる。行つて見ると立派な住居であつた。皮も無い魚の其色朱の如くなるを料理して食はせた。名を問へばニンカンと答へたと謂ひ、一説には又感人羹とも傳へて居る。即ち俗間説く所の人魚のことらしく、之を食した

御蔭に此通り長命であつたので、格別此人の修養の力でも無かつたのだが、小野は深くも之を尊敬して、就いて兵法を學ぶこと六箇年、或時は内々藩主貞山公にも勸めて、一度は御對面なされたと謂つて居る。赤漆の小笠一つ、曾て肌身を離さなかつたのを、殿様だけには御目にかけて。其中には紛れも無い九郎判官直筆の證文、又吉野記と題する一卷の記録があつたなどと書いてあるのは面白いが、他には見た人も無かつたやうである。

不思議なことには右の老人は、たゞ義經の家來といふのみで、在りし世の本名は語らず、清悦といふ盲人のやうな名を用ゐて居た。人が義經記を讀むのを聴くと、そんな事は無い、それは間違ひだと謂つて、ぼつ／＼と話したのが此本だつてあつて、如何にも小野太左衛門自身の筆記であるかのやうに見える。併し實際は決してさうでなかつた。

近頃仙臺叢書の一部として覆刻した東藩野乘といふ舊記には、漢文の清悦翁傳がある。之に依れば清悦物語の始めて本の形に爲つたのは寛文八年、即ち小野氏が平泉の山で此人に逢つてから、五十一年の後である。もう其時分には双方とも此世に居なかつたことは確かである。小野は固より人魚は食はず、清悦自身も亦寛永七年に一度は兎に角死んだことが、現に其物語の中に書いてあるからである。然らば聽いてから此本を書く迄の間に、亦何度とも無き語り傳へがあつたことは明白で、或は座頭の如き専門家も之に參與して居たのかも知れぬ。又さう思つても差支ない個條が幾らでも見出されるのである。

鬼三太殘齡記

清悦の物語といふものは異本が多いのみならず、其異同が信州の甲賀三郎のや

うに、字句の端々だけに止まつては居ない。時として重大なる内容、又は標題さへも變つて居ることがある。最近私が見た東北大學の圖書館に在る一本の如きは書名を鬼三太殘齡記と稱し、序文に歳は重光大康落に在る臘月十日とあつて、仙臺の城下で人の話を筆記したと謂つて居る。即ち辛巳の年のことで、多分は元祿十四年淺野内匠頭が腹を切つた時分の事である。是も明かに清悅の話とあり、又人魚を食つて長命したことも述べ立てられ、衣川合戦の前の日に天地晦冥にして人の顔黄に見え、北上州逆流して大蛇が現出したなどいふ點まで一つであるのに、談話の骨子ともいふべき部分が、他の清悅物語とは異なつて居る。最も顯著なる例を列擧すれば、第一には鬼三太記の方では義經が死んで居ない。他の一方では首になつて鎌倉に送られ、含み狀に由つて頼朝の誤解は釋け、讒言をした梶原が刑罰に處せられて居るに反して、此では中尊寺の三位房法印とかに諫められ

辨慶ばかりを見殺しにして山越しに落ちたと書いてある。杉目行信と云ふ容貌最もよく義經と似た者が、既に北國の道中から身代りに立ち、爰でも義經と名乗つて死んだのだと謂つて居る。次には此方では清悅は自ら堂々と鬼三太の舊稱を名乗つて居る。彼は義經記に於ては合戦の最初に、首の骨を射られて一箭で死んだとあり、堀河夜討の際の如き花々しい働きは無かつたのを、此本では大變な猛者にしてしまつた。全體御厩の喜三太の如きは、近世の鬼一法眼の芝居などでこそ隠分の儲け役であるが、實は義經記特製の人物に過ぎなかつた。それが鬼三太と書いてくれなくては困るの、雑色といふものには二種あつて、をれば其の上等の分だのと、餘計な辯明をして居るのは仙人らしくない。それから清悅物語の方では常陸坊と二人、どうしても死ねなかつたと手輕に書いてあるのを、殘齡記の方では彼奴はけしからぬ男だ。命を惜むのみか主君大切の際に、御手元金を持つて

立退いたと謂つて居る。それから龜井六郎が無茶者で困つた話もあり、更に面白いのは會津に居た福仙といふ鏡研ぎが、或は喜三太の成れの果といふ説もあつたのを、ひどく氣にして取消して居ることである。又伊達政宗が見たといふ赤い筥の中には、鬼一法眼秘傳の一卷があつて献上したやうにも書いてある。會津方面には鬼一法眼の娘皆鶴姫の遺跡といふものゝあるのを妙だと思つて居たが、やはりこの福仙と關係して、古くから話があつたらしいことを、却つて斯んな事から心付いたやうな次第である。

此以外にも北國下りの路筋がちがつて居る。途中で嗣信兄弟の家に立寄るには會津を通過した方が地理に合ふと思つたらしい。此通り何から何までも大ちがひで、強ひて普通の清悦物語と共通の點を求むれば、辨慶が腕力ばかりで智慮乏しく、屁理屈を言つては泰衡兄弟の感情を害し、是には義經も困り抜いて、始終小

言ばかり謂つて居たなど、いふやうな、をかしくも無い點ばかりだ。殊に鬼三太の方は辨慶龜井を悪く言ひ、しまひには辨慶は坊主で無い。髻を切つて髪を短かくして居たので、山伏のやうに見えたのだ。立往生といふのも實は溺死で、衣川の岸近い岩と岩との間に挟まつて、倒れなかつたばかりだなど、自分は生き延びて遁げた癖に、人にけちを附けるやうなことをばかり言つて居る。要するに始から終まで、假にも史書の闕を補ふといふが如き態度ではなかつたので、若しこんな話が後代に及んで珍重されたとするならば、それはもう義經記も耳に蝟で、何か新らしく且つ笑ふやうなものを求めて居た人心に投じたもの、言はゞ三馬の忠心藏偏痴奇論などと同じく、所謂ヲカシ文學の不完全なる發育に過ぎなかつたと見てよいのである。

義經勲功記

ところが爰に又一つの不思議がある。前に申す鬼三太殘齡記は常陸坊海尊を悪黨の如く罵つて居り、普通の清悦物語も私の見た本だけは、少なくとも話者清悦は常陸坊に非ず、「聞けば常陸坊もまた長命をして、仙北の方に住んで居るさうな」と、よその噂にして語つて居るにも拘らず、一方には仙臺以北、平泉地方の一帶に互つて、今尙清悦とは海尊さまの事と、思つて居る人が多いのである。現に清悦物語が本に爲つたと云ふ時から、又十何年もしてから後に、宮城郡岩切の青麻權現の岩窟に現れて、神職鈴木氏の先祖鈴木所兵衛と對談をしたといふ一の異人は、我は常陸坊海尊である、今は名を清悦と改めて居ると、明かに自ら名乗つたと傳へられる。この所兵衛などは、正直朴訥の善人であつたが、やはり信心深い

盲人であり、しかも信心の力によつて目が見えるやうになつた爲に、恐らくはそれから最も熱心に、海尊仙人の奇蹟を人に説いたかと思ふ。今でも右岩窟は深く附近の住民から崇敬せられ、その神の清悦にして又海尊なることを信する者は多いのである。但し常陸坊といふ故に、之を常陸の阿波の大杉大明神と同體なりと説く者もあるらしい。しかも海尊の常陸に居たといふことは夙くより之を傳へ、例へば天海大僧正の如きも、若い頃に彼の地方に在つて、殘夢和尚の海尊に逢ひ長生の秘訣を學んだやうに謂つて居たのである。

さうかと思ふと又同じ元祿の前後に、仙臺領では角田と白石の間を往來して、村々の舊家に書いた物などを殘した白石翁といふ異人があつた。此も實名を語らず年を言はず、それで居て非常な長命であつたらしく、誰を捉へても悴と謂つた角田の長泉寺の天鑑和尚などは、元祿三年に百七歳で死んだが、白石翁は此和尚

をも尙せがれと呼んだ。やはり源平合戦の話が大さう詳しく、折々人の家でその話をしたので、或は清悦かこの世評もあつた。此翁は元祿六年の二月十八日、白石在の安子島氏の宅で、めでたく往生を遂げたにも拘らず、十何年後になつて京都に往つた或商人が、確かに京の或處で見かけたと云ふ話もあつた。

清悦がごくに死んだことは、清悦物語の中に正しく記してあるにも拘らず、尙右の通りにいつ迄もどこかに居つた。この種の仙人になると、どうも死んだと生きて居るとの境が甚だはつきりしない。會津實相寺の殘夢和尚の如きも、辭世を示して立派に成佛し、寺では葬式も濟ませたのに、二十年程後に不思議なことがあるので墓を開いて見ると、空棺であつたとも傳へられる。或は又會津の人が駿河の三保松原で此和尚に逢つた、相變らず源平時代の話をして居たなどとも謂つた。つまりは夙くから、多くの人が言ふことが一致しては居なかつたのである。

故に其一例として見れば、驚くにも當らぬやうなものだが、正徳二年に始めて世に出た義經勳功記は、やはり殘夢の話だと稱して居るのである。餘程のうそつきらしいが編者馬場信意なる者、此書に序して曰く、友人安達東伯久しく奥州に在り、一日老翁の來り訪ふ者あり、字里行藏を言はず、里人も亦知るなし、相馴るゝこと久しくして終に海尊なることを知れり云々とあつて、此書を以て東伯の筆記だと謂ふのである。此海尊は後に名を清庵主と改め、今又殘夢と謂ふとあつて、會津からでも出て來たかの如く粧うて居るが、しかも長命の原因は亦衣川の人魚の肉であり、其時の釣仲間は武藏坊、還りて其一片を源公に獻じ公も亦之を食す。皆共に死せざることを得たりと謂ふのである。然るに近世の所謂義經辨慶入韃説には、實はこの勳功記を根據とする者も少なからず、人魚の肉がうそだとすれば、根本から覆へるやうな話ばかりだ。如何にも心元ない次第である。

人魚の肉

自分たちは今頃成吉思汗の義經であるか無いかを、穿鑿するだけの餘裕は持つて居ない。此際考へて見ようと思ふのは、勿論海尊長壽譚の眞偽では無いので、全體どうしたわけで此様なをかした話が保存せられ、又際限も無く成長して行くかである。さうして先づ略決定して見たい問題は、長命の原因と認められた色々の風説の出處である。

本朝故事因縁集の石上の飴の如き物は、他には類例も聞かぬやうである。會津の殘夢和尚は盛んに枸杞の葉を食つただけだつたと、天海僧正などは人に語つたさうだが、之は眞似やすいので試みた者もあつたが、話ほどの效能は無かつたらしい。ところが清悦物語以下の書に於ては、人羹又は仁羹と名づくる朱の色をし

た魚の肉と稱して、ほとく凡人をして斷念せしむるに足るやうな、珍しい遭遇を説いて居るのである。それが若し清悦乃至は小野太左衛門氏の独自の空想に成つたとすれば、事の奇は稍一段を加へるのであるが、奈何せん是にはあまりに顯著なる先型が存するのであつた。

前に申した若狭の八百比丘尼の物語は、正しく系統を同じうする言傳へであつた。足利氏の中に若狭に八百比丘尼といふ長生の婦人ありしことは、既に馬琴の八犬傳に由つて之を知つた人が多いが、少なくとも當時其風評は高く、或時は京洛の地に入つて衆人に歸依せられたことは、文安六年五月から六月迄の、臥雲日件録や康富記、若くは唐橋綱光卿記等、多くの日記の一致するを見れば疑ふ所は無いのである。但し如何にして其様の長壽を得たかは、此等の記録には何も見えず、林道春が父から聞いたと謂つて、本朝神社考に書いたのが一番に古いが、

是とても清悦物語の出現よりは前であつた。即ち昔この比丘尼の父、山中にして異人に逢ひ、招かれて隠れ里に到る。人魚の肉を饗せられて敢て食はず、之を袖にして還り來るを、其女食ひて長壽なりと謂つて居るのがそれである。

同じ話は又若狹郡縣志、向若錄等にも出て居る。此方では父は小松原といふ村の人で、海に釣をして異魚を獲たのを、娘だけが食べたといふことになつて居る。美しい女性のいつ迄も若いのを、「人魚でも食つたのか」といふ習ひは、今でも諺のやうになつて残つて居る。基く所斯くの如く久しいのである。但し數多い諸例の中で、釣をして手に入れたといふのは殆ど是ばかりで、他は何れも衣川と同じく特に響應してくれる人があつたのであつた。然るを本人は惟んで敢て食はず、却つて無邪氣なる小娘が、其恩惠を専らにしたといふことは、話の夙くからの要件であつたと見えて、現に清悦物語でも同行者の一人が之を持ち歸り、其女の之

を食うた者がつひ近頃まで存命であつたと、不必要に問はず語りを添へて居るのである。鹽松勝譜には常陸坊海尊、衣川にて老人に逢ひ赤魚を貰つて食つた。其婢女も亦之を分ち食したとあるのは同じ話である。

桃井塘雨の笈埃隨筆には、今濱洲崎といふ地に異人來り住み、一日土地の者を招いて馳走をした。人の頭をした魚を料理するのを隙見して、怖れて食ふ者も無かつたが、唯一人之を懐にして歸り、其妻知らずして之を食つたといふ話を載せて居る。此は疑も無く寛永二年の隱岐島紀行、「沖のすさび」の丸寫しであつて、彼には伯耆弓濱の洲崎の話となつて居るのを、今濱洲崎と改めて若狹まで持つて來ただけである。味は甘露の如く食し終つて身とろけ死して夢の如く、覺めて後目は遠きに精しく耳は密に聽き、胸中は明鏡の如く顔色殊に麗はしとあつて、終に生き残つてしまつたのである。七世の孫も亦老いたり、彼妻獨り海仙と爲りて

山水に遊行し、諸國を巡歴して若狹に至り、後に雲に乗りて隱岐の方に去れりとも記し、即ち此島焼火山其他の處々の遺跡を説明して居るのである。人の妻とある例は是がたゞ一つであるが、海仙となつて諸國に遊んだといふのが、何か海存仙人の口碑と因縁あるべく思はれる。但し此話は九州を除くの外、殆ど日本の全國に分布し、しかも大抵は同じ由來談を、若干の差異を以て説いて居るので、即ち平泉の清悦の奇恠談が、必ずしも一人や二人の與太話で無かつたことだけは、もう十分に證明せられるのである。

八百比丘尼の事

然らば人魚の效能と義經記との關係や如何。それを考へるには尙少しく類似の例を列擧して見なければならぬ。若狹の方面には「沖のすさび」と略同じ頃に、貝

原益軒の西北紀行があつて、忠實に土地の所傳を録して居る。小濱の熊野山の神明社に、其頃は既に比丘尼の木像と稱するものがあり、しかもその由來記はまた別箇の趣を具へて居た。昔此地方に六人の長者、折々集まつて寶競べの會を催して居たが、其一人人魚を調味して出したのを、五人の客疑つて食はなかつた。それから家に持歸つて少女が食つたといふ段は、すべて他の例と一つである。

佐渡では羽茂の大石といふ村でも、八百比丘尼此地に生ると説いて居る。やはり異人饗應の話があり、人魚の肉によつて千年の壽を得たのだが、其二百歳を割いて國主に譲り、女自身は八百歳に達した時、若狹に渡つて死んだと傳へて居る。播磨鑑では自分の郷里神崎郡比延村に、此比丘尼は生れたと主張する。是も八百になつて比延川に身を投げたとも謂へば、或は今一度人魚を捕りに、明石の浦へ出かけたまゝ歸つて來ぬなごゝも謂ふのである。土佐國でも同じ人の海に入つた

話、其他色々の遺跡はあるのだが、人魚に關係せぬものはすべて省略する。西郊餘翰卷一に、土佐高岡郡多野郷の賀茂神社にある八百比丘尼の石塔の事を記して居るが、白鳳十二年といふ大昔、此海邊に千軒の民家があつた時代といふ。七人の漁翁が人魚を捕つて刑に處せられた。七本木といふのが其古跡である。村に一人の醫者があつて、窃かに一切れの肉を貰ひ受けて、自分の娘に食はせると、即ち後の八百比丘尼になつた。三百年を経て一度還り、此石塔を建てたとも謂ひ、或は死んだ後に若狭から届いて來たともいふから、人魚を食つたといふ證據には向かぬのである。

關東諸國殊に東京の周圍にも、此比丘尼の栽ゑて置いたといふ老木が多く、下野にも上總にも色々の遺址はあるが、人魚の話はまだ聽いて居ない。しかも海も無い美濃などにも、やはり麻木長者の娘が麻木の箸に附いた飯を、芋ヶ瀬池の魚

に施した陰徳で、八百比丘尼と爲つて若狭に往つて死んだといふのが同じ話だつたらしく、更に遡つて飛驒の益田郡、馬瀬の中切の次郎兵衛酒屋の話などは、山國らしい昔話に變化して今も語られる。此酒屋へ折々一人の小僧が、小さな瓢箪を持つて一斗の酒を買ひに來る。疑はずに量つて與へると、幾らでも其瓢箪へ入るのだ。試に小僧の跡をつけて行けば、村の湯ノ淵といふ處まで遣つて來て振返り、わしは龍宮の乙姫様の御使だ。おぬしも御座れと引張つて行き、僅か三日の間款待を受けたと思つたら、もう此世では三年の年季であつた。歸る際に龍宮の寶でキキミミといふ宮を下される。耳を此に附けて居ると、人間にはわからぬごんな事でも聞かれる。家に娘があつてそれを不思議に思ひ、誰も知らぬ間にそつと開いて見ると、宮の中には人魚の肉が入つて居て、如何にも旨さうな香氣がする。つひにその古い肉を食つてしまふと、其御蔭で娘は八百比丘尼になつた。村

の氏神の雌雄杉の根もとへ、黄金の綱をこしらへて深く埋め、いよいよといふ場合には出して使へと謂つて、自分は仙人になつて何れへか出て往つたといふのである。ちやうど刊本の義經記が編纂ものなる如く、是も地方に流れて居る三つ五つの物語を、端切り中を摘んで冬の夜話の用に供したものでらしい。

まだ幾つかの例が残つて居るのである。丹州三家物語に録する所は、殆ど神社考と大差無く、たゞ比丘尼の生地を若狭鶴崎としたのみだが、丹後には別に竹野郡乗原といふ部落に、舊家大久保氏の家傳といふものゝあることを、近頃の竹野郡誌には詳述して居る。或時此村へ一人の修験者が來て居つて、庚申講に人々を招いた。それから先は例の如くだが、此家の娘は比丘尼ながら樹を栽ゑ石を敷き色々と土地の爲になつて居る。紀州那賀郡丸柄村の高橋氏でも、庚申講の亭主をして居ると、見なれぬ美人が來て所望をして仲間に入つた。其次の庚申の日には

私の家へ來て下さいと招かれたが、其晩土産と謂つて紙に包んでくれたのが、例の人魚の一鱗であつた。歸つて帯を解くときふと取落すと、其折二三歳の家の小娘が拾つて嘸み込んでしまつた云々と傳へ、今も其家の子孫といふ某は住んで居るが、此事あつて以來いつも庚申の晩には、算へて見ると人が一人づゝ多く居るといふので、とう／＼庚申講は營まぬことになつた。こゝでもどういふわけか八百比丘尼は、末に貴志川へ身を投げて果てたと傳へて居る。越後の寺泊に近い野積浦の高津家にも、やはり人魚を食つた八百比丘尼は此家から出たと謂ひ、今も手植の老松が残つて居る。同じく庚申講の夜山の神様に招かれて、そんな物を貰つて歸つたと謂ふのである。最後にもう一つは會津の金川寺といふ村でも、比丘尼は此村の昔の住人、秦勝道の子だつたといふ口碑がある。勝道は亦庚申講の熱心な勸進者であつたが、村の流の駒形岩の淵の畔に於て、やはり龍神の饗應を受

け、其食物を娘が食べたといふ點は、丹後紀伊など、似て居たが、是だけは人魚で無くて九穴の貝といふものであつた。

搜したらまだ何程も例は出て来るのだらう。私が知つただけでは娘が取つて食つたといふのが、平泉を加へて十件あり、食物は其のたゞ一つのみが九穴の貝であり、更に庚申講の晩といふのが、互に離れた土地に四つ迄もある。天平以前に庚申祭などがあつたかと、野暮な疑問を抱くことを止めよ。庚申は要するに夜話の晩であつた。終夜寝ないで話をする爲に、村の人の集まる晩なのである。即ち人魚を食つたといふ長命の女の奇蹟を、發揮し宣傳するには最も適したのが、庚申講の夜であつたのである。其話をさも事新らしく、成るべく知つた人の多く居らぬやうな土地へ、斯うして持つて來ようといふ考の者が、昔もあつたことだけは想像せられる。

九穴の貝

八百比丘尼とは謂はぬが、同種の話は別に又九州にもあつた。筑後柳河附近の本吉の三軒家、唐人竹本翁の子孫と稱する家でも、曾て此家の娘が牡丹長者の乳母であつて、やはり不思議な食物から長命を得たと傳へられて居る。牡丹長者は肥後の桑原長者と、山を隔て、寶競べをして居た。或時萬年貝と名づくる稀有なる螺の貝を送つて來たのを、誰も食はうとはせぬ故に此乳母が貰つて食ひ、それから無限の長生をしたと謂ふ。至つて貞淑な婦人であつたが、何しろ死なぬのみか若くて美しい故に、夫を換へること二十四人に及んだのである。いつ迄もく固有名詞のみを入れ換へつゝ、日本人は斯んな話ばかりをして居たものと見えた。どうして又それがさう大なる興味を以て、短命な凡俗からもてはやされて居たも

のか、自分にも實は久しく不明であつたが、斯ういふ風に考へて行くうちに、幽かなながらも原因がわかつて來たやうな氣がする。

なるべく手短かにもう一つだけ、近い例を擧げるならば、今から百三十年ほど前の寛政九年に、筑前蘆屋浦の傳次といふ者が、領主の命に由つて、家に傳ふる壽命貝といふものゝ由來を、詳しく申立てたことがある。沖繩あたりで千年貝、又色の佳いのを萬年貝といひ、南方の海では折々取れる大きな貝があるが、多分あれのことだつたかと思ふ。土地の名木神功皇后の船留松の根に、埋めてあつたのを掘出した。之に水を盛つて飲ませると、疫病其他を治するの効があると謂つた。どうして又そんなものが出て來たかに就いては、それから更に十五六年前に書いた、庄浦仙女物語といふものが要領を盡し、其書は夙くから江戸の隨筆家中に大評判であつた。某年此附近の船頭に、奥州津輕の或海岸に船がゝりをして

居た者が、上陸して村の奥の山へ遊びに往つた。三十ばかりの美しい女が一人出て來て、國はどこかと聞いて非常に懐かしがり、私の故郷も筑前だと謂つて、色色な事を尋ねるが話がどうも合はぬ。實はもう私は六百四十歳ばかりになる。若い時分に病氣をして居ると、子供たちが案じて珍しい貝を捕つて來て食はせてくれたら、段々若くなるばかりで死ななくなつてしまつた。子にも孫にもおくれた故に、是非なく國を出て來て、それから亭主も二十何人とか持ちかへたが、自分ばかりはまだ斯うして居る。貝の殻だけはあまりに奇妙なので、斯うくした松の下に埋めて置いた。尋ねて見てくださいと傳言したので、そこで右の傳次が之を發見することにはなつたのである。

此話は勿論確實性に乏しい。少なくとも途中で誰かゞ若干はうそをもつてゐるしかも私などの注意するのは、九州の船頭の還つて來ての話に、この女が壇の

浦の合戦前後の事を、よく知つて居るのに驚いたと話したといふ點である。何でも稚ない天子様が、筑前山鹿とかに御滞在の際のことで、毎度此女は魚を賣りに行つて、陣屋々々の様子を見て居たと語つたさうである。

全體人が長命をすれば経験の多いのは知れたことだが、何で又斯ういふ仙女までが、是非とも源平の合戦を談じなければ止まなかつたか。それから後の色々の大事件は棄てつぽかして、あの頃ばかりをさうは喋々するのであるか。つまりは世間の人たちも、比較的平家物語や義経記に親しかつた爲でもあらうが、若狭の八百比丘尼などもやはり源平の盛衰はまのあたりと謂ひ、義経辨慶の一行が修驗者の姿をして、北國街道を下つて行くのに、ちやうど行逢つて覺えて居ると語つたさうだ。八百比丘尼の年から勘定すると、凡そ五百三十幾歳の時のことだが、此事一つばかり記憶して其他の大事件に疎かつたらしいのは、常陸坊海尊の場合

よりも、更に一段の不可思議であつた。或はもと年を取つて居るから知つて居たのでは無くて、あまりよく知つて居るから長壽者でなければならぬと、人も自分も感ずるやうになつたのではあるまいか。

おとら狐と玄蕃巫

是と必ず何かの關係があらうかと思ふ話は、三河の長篠の古城址を中心としてあの附近一帯の田舎に甚だ悪い狐が居る。其名をおとら狐と稱し、又おとらと名乗つてもよい理由のあつたことは、會て「おとら狐の話」と題する小著を以て、之を研究して見たことがある。非常な古狐で、其證據にはおとらが人に憑くと、其人は必ず長篠の合戦の光景を見て居たやうに話する。それで忽ち彼なることが知れるのであつた。又長篠だけならまだよいが、ずつと離れた川中島の合戦まで話

して聽かせる。しかも此合戦談の大部分は、ごうも甲陽軍鑑の出たら目であつて實は無かつた事らしいといふやうな話も多いのである。それにおとら狐は川中島に居たとき、うつかりとして流れ弾に中り、片目と片足とに怪我をしたと謂つて今以て之に惱んで居るらしく、彼に憑かれた者は一方の目から眼脂を出し、又必ず片足を引きずること、恰も長篠よりやゝ南方の牛久保といふ町を郷里とする、山本勘介と同じであつた。それにも何か隠れたる因縁のあるらしいことは、早くから考へて居るが、自分はまだ十分には合點し得ないのである。

又信州の松本附近では、桔梗ヶ原を本據として玄蕃壺といふ狐が居た。始めて鐵道が此平野に通じた頃、汽車に轢かれて死んだともいへば、或は今でもまだ生きて居るともいふ。此狐も武田合戦の始末をよく知つて居たのみならず、頗る之を人に語りたがつたやうな形がある。珍しいことには一年に一度とか、例へば若

狭などの異人同様に、廻状をまはして近村の住民を招いて此話をして聽かせた。急造りの立派の家の中で、此時ばかりは本物の御馳走を、ごこからか持つて来て食はせたといふことである。但し此方はもう誰でも笑つて聽くやうな昔話と化し去つたが、三河のおとらに至つては今尙現實であつて、待つて居たらば恐らく此から後も例が出て來よう。斯ういふ不思議な資料は、過去の記録になつてしまはぬうちに、よく調べて説明を求むべきである。人間界のしかも常人の間の出來事に、意味不明といふものがあつてよいものでは無い。

そこで立戻つて流布本の義經記に、常陸坊以下十一人までの家來が、朝から寺參りなどをして居て、をめぐると生き残つたといふ一條を考へて見る。全體そんなつまらぬ事を、誰が知つて居て人に話したのか。本人どもが白狀したとすれば如何なる機會に如何なる間に答へて、何人に語つたとすべきであらうか。それよ

りも更に大なる不審は、高館城内の悲壯を極めた光景、十郎權頭が最期の忠節の如きは、果して之を目撃して末代に語り傳へた者が、人類の中にあり得たであらうか。

しかも海尊はたゞ長命をして居たばかりに、永く此地方に於ては歴史家の權威を失はなかつたのである。氣仙風土草の記する所に依れば、此郡唐丹村の荒涼の海に近く、龜井墓と稱する古墳があつた。どうしてそんな事がわかつたかといふと、江戸時代の初頃に、常陸坊海尊が松前からの歸途に、此村を通つたことがある。其折出會した土地の山伏成就院なる者に向つて、此が龜井六郎の墓だと教へてくれたによつて信ずるので、彼は往々にして此の如く信任を濫用して居る。

さうかと思ふと加州の金澤などでは、龜井六郎と常陸坊と二人、仲よく今も暮して居るといふ者が、現に百五十年前まであつた。號を殘月と謂ふ道心坊があ

つて、小松原宗雪と稱する浪人と、寒山拾得の如き生活を續けて居た。もとは此城下の淺野川が、東西に流れて居たものだから、謂ふので、さてはと土地の人々も耳を時てた。二人に源平時代の話をさせようとする者は、わざと知らぬ顔をして其前で義經記を朗讀する。さうすると忽ち釣込まれて、それは大ちがひなご、謂つて、思はず本當の話をしたといふ。多分は殘夢や清悅の如く、いや義經公はあまり風采の揚がらぬ反齒の小男であつたことの、辨慶は三十七八の色の白い好男子であつたのと、もう何人でも反證し得ないやうな、新事實ばかり説いて居たことであらう。ごちらが釣込まれたか、知れたものでは無いのである。

それに尙よく氣を付けて見ると、いつでも三河萬歳の才藏などの如く、脇に居て相の手を入れ、餅ならばこね取りをする役が一人あつた。加賀の殘月の小松原宗雪、會津の殘夢の無々老人と福仙、平泉の清悅の小野太左衛門に於ける如く、

少しは傍から註解し敷衍する者が居らぬと、話が人の胸を打つまでには、はづんで來ぬものであつたらしい。それが民族初期の文學の進んで出た經路であり、同時に又現代の都府文藝が、親近なる批評家に取卷かるゝに至つた遠因でもあつたらう。陸中黒石の正法寺などでは、毎度和尙の處へ話しに來る常陸カイドウを、あれはもと義經公の家來だと、告げ口をしたのが境内の石地藏であつた。そこで見顯されて歸つて行くときに、變にこの地藏が煙たいやうな顔をした。さては此奴がしやべつたのかと、いきなり地藏の鼻を捻ちつたと謂つて、今でも鼻曲り地藏様がある。先づ是ほどにしてまでも我々の昔話は、是非とも長命な人の口から、直接に聽かねばならぬ必要があつた。誰がどういふ方式で話をしてくれやうとも、内容次第で其眞價を判別し、あとは各自の想像力で調味するといふ如き、今風の聽手は少なかつたのである。

語り部の零落

まだ是だけでは十分な説明で無いかも知れぬが、私の今持つて居る假定は、さう込入つたものでも何でも無い。つまり偶然に判明した清悦物語の成立ちに基いて、更に義經記其ものゝ起原までが、推量し得られるかと思ふのである。義經記の近世の語り様は、他の多くの歴史談も同様に、所謂「げな話」「ださうな話」の體裁になつては居るが、本來はやはり清悦物語の如く、當時見て居たと稱する人の直話體ではなかつたかと謂ふのである。

文字を知り記録を愛する者が、書いたものといへば一應は悉く有難がつたやうに、記録と縁の無い人々には語り事を信する必要があつた。但し昔の人々の事實認定には、噂と實驗との明かなる差別があつて、現に私が見た私が知つて居ると

いふ類の言葉で無いと、之を信ずることが出来なかつたものかと思ふ。數百年の歲月を隔てゝから、そんな人を求めることは不可能のやうに見えるが、前代人には其は無理なる注文でも無く、又有り得べからざる條件でも無かつた。即ち人には死後の靈がある。優れたる靈魂は生きた人に憑いて、其人の口を借りて何でも言ふことが出来た。託宣は決して豫言ばかりではなかつた。人の現在の疑問を解く爲には、今日と同じやうに過ぎ去つた理由を述べなければならぬ。しかも人間の知識慾は、先づ最初には霧立つ野邊の如き、茫洋たる前の代に向はうとするのが自然である。現實の畏怖憂苦あり、不安ある場合は尙更のことであつた。

神話が單なる記述といふよりも、屢々説明に傾いて居たのは此理由からである。神話が神語として久しく尊重せられたのも、根本には人の生活上の要求が横はつて居たからで、又親しく實情を知つた靈の言なるが故に、何程荒唐であらうとも

之を信ずることが出来たのである。従つてそれが常人の仲介を經、若くは記録の文字を以てのみ人に傳へられるやうになれば、その最も重要な特質は消滅し、更に第二次の鑑賞に入らなければならぬのは勿論である。稗田阿禮が天朝の命を拜して、歴代の舊辭を語つたのは、果して二者何れの部に屬すべきものかは決して、言が、少なくとも彼女の家は巫女の家であつた。曾ては必ず神に代つて、と言はんよりも寧ろ神々に身と口とを貸して、人に歴史を語り傳へるのが、此家の職掌であつたのである。單なる暗記の力のみの如く、之を想像するのは誤つて居る。

しかも此様式は神話が既に信せられず、頗る文藝的の興味を以て世に迎へらるるに至る迄、尙變更せられなかつた例も多いのである。例へば金田一京助君が探訪せられたアイヌの聖典、即ち特權ある舊家のみが保持して居た所謂神傳大傳の類に止らず、或純良なるアイヌメノコが、自ら和譯した動物説話の如きも、悉く

皆第一人稱の自傳であつた。即ち人が其物語を歌ふのは、其神其靈が一々彼に憑いて、其口を假りて自ら説くのであつた。現に目前に在つて語る者の、凡庸なる我仲間の一人に過ぎぬことを知りつゝも、別に背後に隠れて彼をして言はしむる力あるを信ずる故に、興味と感動とは常に新たであり、或は信仰變化の後に至るまで、尙其様式に對する愛慕の情を斷つことを得ないのであつた。

我民族の初期の文學に於ても、心ある人は今も其若干の痕跡を見出すことが出来る。更に一步を進めて、文字の拘束を受けなかつた地方若くは階級を求めて見たならば、當初の物語の現在尙固く信せられて居る部分、即ち史傳と名づけて如何なる反對の證據あるも、之を一蹴し去ることを辭せざる様な村々家々の由來記にも、やはり先入主や愛郷心以外に、久しく其確信を育て、來た原因のあつたことを見出すであらう。現に神様がさう仰せられた、何某の靈が出て其通り語つた

といふ眞實が、さう短かい期間には覆へざるべきものではなかつたからである。

併し結局は意識の有無に拘らず、もと人間の想像力に根を差した以上は、自由に又美しく成長せねばならなかつた。さういつ迄も古い形だけを、守つて居るわけにも行かず、第一には聽く者の側の要求が、時と共に變化して之を動かさずには止まなかつた。奥州には衣川の悲劇以外に、又前九後三の合戦談があつた。義經記の中では金賣吉次が、若き貴公子に向つて長々と之を語ること、恰かも舞の本の烏帽子折に於て、山路の草刈る夜の笛の物語を、遊女に試みさせて居るのと同じであつた。それから尙行けば悪路王大竹丸の退治、三代田村の勇猛談なども、之を信せんとする人々も、もう之を藝術として樂まうとする者と、相交錯して居たのである。中央の歴史と交渉の無いものでは、膽澤郡には掃部長者の物語、長者の妻が後に池の大蛇となり、松浦小夜姫を人柱に立てようとした話、それから